

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－平成 30 年度－

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

目次

1. 外部評価委員会評価報告
2. 外部評価委員会委員名簿

博物館部会

研究所・センター部会

平成30年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価に対する外部評価委員会評価結果

中期目標大項目	中項目	小項目	自己点検評価	部会評価	総会評価	業務の まとめ			
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承	B	B 名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 栄原 B 名児耶 B 榊原 B 寺崎 B	B	博物館			
		(2)展覧事業	A (部会評価を反映)	A 名児耶 B 河合 A 浜田 A 小笠原 A 小松 A 坂本 A 栄原 A 名児耶 A 榊原 B 寺崎 A	A				
		(3)教育・普及活動	B	B 名児耶 B 河合 A 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 栄原 B 名児耶 B 榊原 C 寺崎 B	B				
		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	B	B 名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 A 坂本 B 栄原 B 名児耶 B 榊原 A 寺崎 B	B				
		(5)国内外の博物館活動への寄与	A	A 名児耶 A 河合 B 浜田 A 小笠原 A 小松 A 坂本 A 栄原 A 名児耶 A 榊原 A 寺崎 A	A				
		2. 文化財及び海外の文化遺産保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施	(1)新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	A	A 岡田 A 河合 A 寺崎 A 小笠原 A 児島 A 坂本 A 斎藤 A 名児耶 A 寺田 A 寺崎 A 柳林 S —		A	研究所・センター	
			(2)科学技術を応用した研究開発の進展に向けた基盤的な研究	A	A 岡田 A 河合 A 寺崎 A 小笠原 A 児島 A 坂本 A 斎藤 A 名児耶 A 寺田 A 寺崎 A 柳林 A —		A		
			(3)文化遺産保護に関する国際協働	A	A 岡田 B 河合 A 寺崎 A 小笠原 A 児島 B 坂本 B 斎藤 A 名児耶 A 寺田 A 寺崎 A 柳林 A —		A		
			(4)文化財に関する情報資料の収集・整備に関する調査研究成果の公開・活用	A	A 岡田 A 河合 A 寺崎 A 小笠原 A 児島 A 坂本 A 斎藤 A 名児耶 A 寺田 A 寺崎 A 柳林 A —		A		
			(5)地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	B	B 岡田 B 河合 B 寺崎 B 小笠原 A 児島 B 坂本 B 斎藤 B 名児耶 B 寺田 B 寺崎 B 柳林 A —		B		
	II. 業務運営の効率化に関する事項				B	— —	B 河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B		法人共通
	III. 財務内容の改善に関する事項				B	— —	B 河合 B 小笠原 B 坂本 A 名児耶 B 寺崎 B		
	IV. 予算、収支計画及び資金計画				B	— —	B 河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B		
	V. その他事項				B	— —	B 河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B		

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（総会）

まとめ

機構全体評価へのコメント	
河合委員長	当初の目標を十分に達成しており、博物館・研究所・センターには、それぞれに工夫と努力のあとが窺える。以前から主張してきたことであるが、評価の評定区分を明示することで、公表に際して、この評価の公平性、客観性、明瞭性などが担保されることになると考えるので良いことと思う。
小笠原委員	全体的に所期の目標を達成している。
坂本委員	全体として、限られた要員や予算のなかで工夫を重ねておられると考えます。5G時代が到来しますが、リアルな文化財が持つ力を広く社会に発揮し、訴求していただけるよう機構には切に期待します。
名児耶委員 (博物館部会長) ※以降同じ	全体として、運営、活動は一定の成果を維持している点で評価できる。この維持することが重要で、地道な活動を維持するための人材や予算の確保についての努力に敬意を払いたいが、今後の海外からの来館者の急増に対応した、多言語対応については、館内での案内等さらなる工夫が必要な時期にきていると思われ、これらも日常的業務として根づくことを期待したい。
寺崎委員 (研究所・センター副部会長(岡田副委員長兼研究所・センター部会長代理)) ※以降同じ	—
【博物館業務】	
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承	
自己点検評価 B 委員評価 B	
河合委員長	委員評価 B 各館それぞれに特徴をもったやり方(対応法)に従って年度目標を手堅く達成したものと評価する。限られた予算のなかで、多様かつ充実した展示を行うためには収蔵品の充実が極めて重要である。限られた予算で作品の購入に難渋するのであれば、寄贈品、寄託品の受け入れは有効である。民間にある文化財の保存、次世代への継承にも寄与することになる。次の課題は、寄贈・寄託者、特に寄贈者に対する顕彰方法を検討すべきと思う。例えば税の優遇など。
小笠原委員	委員評価 B —
坂本委員	委員評価 B 急激に成果が拡大する類いの活動ではないでしょうから、将来にむけて情報収集を重ねてください。
名児耶委員	委員評価 B 新規購入や寄贈、寄託品の受入れも順調と判断できる。より積極的に取り組み、既存資料を補填して充実した平常陳列の構築を望む。特に目立つ事業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命である。
寺崎委員	委員評価 B 九国博による有形文化財の収集・寄贈・寄託品の受入が大きく伸ばした点が特筆される。他の博物館も着実に運営されていると考える。
(2) 展覧事業	
自己点検評価 A (博物館部会委員評価反映) 委員評価 A	
河合委員長	委員評価 A 各館とも努力の結果として目標を超える入場者を獲得しており、日ごろの研究成果を生かす企画力の高さや展示の工夫によって観覧者の十分な満足を得たと評価出来る展覧会も少なくなかった。一方、入場者数の多さを評価判断の拠り所として、内部評価をSにすることにはやや抵抗感を感じる。ただこのような皮相的な判断によるものではないと思うので、例えば、内部評価はAとし、コメントにおいてその展覧会における鑑賞者の満足度、学術的な特段の寄与などを主張することによって、わたしたち外部評価委員がSをつけるというの何かスマートな感があるのではと思考する。
小笠原委員	委員評価 A 平常展については、九博が目標未達であるが、東博で目標を大きく超えていることで順調に推移したこと、及び特別展についても東博の「縄文」や「顔真卿」京博の「京のかたな」など、軒並み目標来館数を上回っており、前年度実績を

		下回るものの、有形文化財を活用した歴史・伝統文化の内外への発信としては所期の目標を上回る成果が得られていると評価する。後掲の「自己収入の拡大」のA評価につながるものであり、持続可能性の観点からも高く評価する。
坂本委員	A	全体の来館者数が前年比マイナスですが、縄文展や「京のかたな」展など注目を集めた特別展もありA評価に値します。ただし部会評価委員会でも指摘があったように、正倉院展の仮設トイレには常に違和感を覚えます。定例の催事であるならば、それを見込んだ環境整備をするべきではないでしょうか。
名児耶委員	A	他の委員の意見にもあるように来館者を集めた特別展が多かったことは事実であり、各館の努力に敬意を表したい。一方、長い行列のできることは、一つの象徴であるが、特別展における観覧者への様々な対応は、今後の課題でもあろう。また、努力は感じられたが、増加する外国人へのさらなる対応も重要であらう。観覧者数ばかりではなく、展示の目的が伝わっていたかを、来館者から確認することも重要と思う。特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示をじっくりと取り組むことも必要かと思う。
寺崎委員	A	「顔真卿」（東博）、「春日大社のすべて」（奈良博）、「初公開！天皇の即位図」（京博）など、内容の充実した印象深い特別展・特集展示が多く開催された。来館者数の多寡・達成率よりも展示の質の高さと来館者の満足度の方を優先して評価すれば、A評価が妥当と考える。

(3) 教育・普及活動

自己点検評価 **B** 委員評価 **B**

河合委員長	委員評価 A	各館が独自に立てたプログラム（企画）が、それぞれに定着して来たように思われる。さらに将来を見据えた若年層に対する多様な対応も検討、実施されていると思われなど、各館ともの評価すべき点は少なくない。博物館・美術館における教育。普及活動の充実は、今後の大きな課題であり、ナショナルセンターである当機構の各博物館は、そのリーダーシップをとることが期待される。
小笠原委員	B	親と子のギャラリーや文化財に親しむ授業、日本文化体験補助などの教育・普及活動等においては、大きな成果が得られたものと評価する。
坂本委員	B	外国人対象のプログラムや若年層（子ども・学生）ターゲットの企画など、工夫が凝らされていると考えます。
名児耶委員	B	各館のさまざまな活動が広がりを見せている点が評価できる。特に博物館活動の中でも、若年層への教育・普及活動は、将来を考えても重要であると思うが、かなり成果を挙げていると思う。人材確保や時間確保など、さらなる発展も考えてほしい。
寺崎委員	B	「学習機会の提供」という点で、各館の努力により、講座やプログラムへの参加者が大きく増えている点が評価される。

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

自己点検評価 **B** 委員評価 **B**

河合委員長	委員評価 B	博物館事業のいわば要であるこれらの事業を着実に実行し、成果を上げるためには、調査研究が不可欠であり、これを避けることは出来ない。研究員の調査研究のための時間とそれを担保出来る資金の調達も肝要であろう。外部協力者や外部資金の導入などの検討が必要となろう。
小笠原委員	B	—
坂本委員	B	山城鍛冶の調査研究（京博）や、南都古代・中世の彫刻に関する調査研究（奈良博）など、意欲的な取り組みがいくつもありました。
名児耶委員	B	博物館活動での調査研究が、特別展の忙しさのための研究活動が制限されないことを期待する。とくに、長く保管していながら、まだ手付かずの文化財のさらなる研究も進めてほしい。
寺崎委員	B	各館ともに展示業務が多忙な中で、調査研究を着実に継続し、成果をあげている点に敬意を表したい。

(5) 国内外の博物館活動への寄与

自己点検評価 **A** 委員評価 **A**

河合委員長	委員評価 B	文化財活用センターの設置が、このことへの対応処置と判断されるが、「保存のための活用という観点」を持つ、わたしにとっては、当該センターの活動については引き続き注視していきたい。一方、無論、その活動対しては、期待もしている。
-------	-----------	--

小笠原委員	A	東博の国内向けが牽引したことが寄与し、国内外への収蔵品及び寄託品の貸与件数が伸長している。
坂本委員	A	創設された文化財活用センターとの連携により、これまで以上に館外との協力が進展しており、減少傾向にあった作品貸与件数が大きく伸びたことを評価します。
名児耶委員	A	概ね順調に、各館のできる範囲での最大限の活動を展開していると判断できる。
寺崎委員	A	総合的に見て、A評価が妥当であると考える。
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員評価 A	当初の目標に従って、着実に成果を上げているものと評価する。情報の公開や海外との研究交流に実を上げていることが、発行された報告書等によって示されていると思う。
小笠原委員	A	海外との関連機関との研究協議の成果が得られている。
坂本委員	A	少子高齢化による担い手不足や地域の過疎化、自然災害などにより、無形文化財は常に危機にさらされています。保護・活用にご尽力ください。
名児耶委員	A	一般人には、研究所での活動が伝わりにくが、報告書の通り、着実に成果を挙げていると判断できる。
寺崎委員	A	研究成果・情報公開・海外との連携、いずれも十分な成果をあげていると認められる。研究所・センター部会委員からはS評価の意見もあったが、全体としてはA評価が妥当であろう。
(2) 科学技術を活用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員評価 A	名児耶委員の指摘されるように、一般人には研究所の活動は確かに解かり難い。しかし、むしろそれがこの種の研究所の研究の特徴でもあり、地道な研究成果の蓄積こそ肝要である。
小笠原委員	A	—
坂本委員	A	廉価な機器を改良して文化財の調査に活用できる手法を確立し、従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録ができること。今後の普及が注目されます。
名児耶委員	A	これも一般人には、研究所での活動が伝わりにくが、成果を挙げていると判断できる。文化財のために年代測定など、研究の基本となるデータの集積を着実に進めていることは、継続しているだけでも重要であるので、それを維持してほしい。
寺崎委員	A	両研究所ともに、従来より積極的に科学技術を取り入れて、調査研究に応用し、文化財研究を推進してきたが、今年度も十分な実績をあげたものと評価できる。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員評価 A	三機関はそれぞれの努力によって当初の目標を達成したと評価するに十分である。しかしながら、世界、特にアジアの情勢（国勢・国情）は、多様に変化している。その変化を見据えた上での国際協働が今後の課題となろう。
小笠原委員	A	国際的な協働を全方位的に実施し、文化遺産保護に貢献していると高く評価する。
坂本委員	B	グローバル化が進む現代、アジア地域などとの連携・協力について内外から期待が高まっています。限られた条件下であることは理解していますが、さらに推進していただきたく要望します。
名児耶委員	A	この活動も文化財を維持していく上で重要であることは当然だが、研究の継続もこのまま続けてほしい。継続しているだけで、評価されると思う。
寺崎委員	A	三機関ともに国際協働に取り組み、技術支援・人材育成・情報交換を行っており、その成果も着実にあがっているものと判断される。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員 評価 A	会議の際、東文研所長に確認したように、同研究所における売り立目録のデータベース化とその公開は、日本美術史研究に多大な貢献をしたことを特記したい。他研究所やセンターも同様であろうと思うが、とかく日本人研究者が軽視しがちな、アーカイブ、レゾネなどのデータベースは、諸研究の基礎でありその集積の責めを負う、研究所の存在は今後とも重要である。こうした地道な努力を続ける、それが正当に評価されることが望まれる。
小笠原委員	A	—
坂本委員	A	—
名児耶委員	A	研究の成果を公開していることが評価できる。これも地道な活動であるが、時には博物館と共同での公開を考えても良いかと思う。
寺崎委員	A	報告書の刊行、データベースの作成・更新、講演会開催など、継続事業ではあるが、成果の公開・活用としては十分であると思われる。特に奈文研のデータベースへのアクセス数が900万件を超えるというのは特筆され、今後もデータの充実につとめてもらいたい。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
自己点検評価 B 委員評価 B		
河合委員長	委員 評価 B	研究者に対する研修や協力は十分に行われており、研究所・センターに課せられた責めは十分に果たしていると評価する。しかし、わたしの個人的な懸念は、地方公共団体の文化財担当、あるいは文化振興に携わる事務系職員の文化財に対する理解や保護意識の低さに、研究系職員は難渋しているように見える。この部分における対応は出来ないものだろうか。検討課題として残したい。
小笠原委員	A	地方公共団体に対する文化財に関する協力・助言等及び文化財防災体制について多方面にわたる積極的な対応を評価する。
坂本委員	B	文化財活用センターに相談窓口を設けるなど、迅速な助言、援助が可能になりました。さらに取り組みを強化されることを期待します。
名児耶委員	B	広範囲な研究成果をもとに全国の関係団体への助言と継続する対応等の活動が評価できる。Aに近いBとしても良いと思う。
寺崎委員	B	両研究所による各種研修・助言・調査協力は、順調に進められていると判断される。また、本部事務局の文化財防災ネットワーク推進室の活動も高く評価される。ただし、個々の事業毎の評価を積み上げていけば、全体としてはB評価が妥当であろう。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価 B 委員評価 B		
河合委員長	委員 評価 B	目標を立て、それを実行・実現するための工夫と努力のあとが認められ、表記の評価になった。引き続き努力や工夫の継続が望まれる。
小笠原委員	B	内部統制委員会やリスク管理委員会の開催頻度のアップや内部監査室の専任職員配置等内部統制体制を強化している。当該内部監査室も、監査要点に併せて、各博物館、研究所にも往査している実績がある。
坂本委員	B	計画通り進んでいるものと判断します。
名児耶委員	B	現在の目標達成を評価できるが、これを維持するには、人材確保等に余裕が持てる状態が望ましい。
寺崎委員	B	—
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価 B 委員評価 B		
河合委員長	委員 評価 B	自己収入の増加とともに、外部資金の導入・確保については引き続き努力をして欲しい。企業や個人による寄付などの協力を得るには、一方で国民の寄付意識の向上が望まれる。
小笠原委員	B	自己収入について、目標額を上回る成果を安定的に上げていること及び外部資金の獲得も安定していることは高く評価する。一方、運営交付金収益割合は上

		がっている。
坂本委員	A	自己収入の拡大においては毎年目標額を上回っており、また今年度は外部資金の獲得も前年比プラスの結果となりました。保有資産の活用にも工夫が凝らされていると感じます。
名児耶委員	B	予算確保は難しいことではあるが、博物館や研究所が国民にとってもっと身近な存在で、企業や個人からの寄付などの協力を得やすい状況を少しずつ積み上げることができれば理想的だと思う。
寺崎委員	B	—

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

自己点検評価 B 委員評価 B

河合委員長	委員評価 B	妥当な判断と経営努力によって、目標を達成したと評価できる。この項目では人件費の問題は上がってくると思うが、現状では容認せざるを得ない努力のあとを認めたい。
小笠原委員	B	安定している。
坂本委員	B	—
名児耶委員	B	経営努力は評価できるが、これがAとなることはできないであろう。現状維持ができることが一番大切であろう。
寺崎委員	B	—

V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価 B 委員評価 B

河合委員長	委員評価 B	各委員がしばしば発言しているように、機構の健全・確実な運営や教育、研究活動の進展は、優秀な人材の確保にあることは言うまでもない。しかし他方では限られた人件費や研究員に与えられた研究時間の圧縮（業務の多様化による負担増）などの問題にも未解決部分が少なくない。これらについては短期的でなく、中期的な解決課題として取り組んで欲しい。
小笠原委員	B	優秀な人財確保は、事業継続に不可欠な要点であるが、今年度については、前年度以上に適材適所に確保ができていていると考える。
坂本委員	B	外部評価委員の運用について、委員から挙げた意見を真摯に検討していただいたと感じています。
名児耶委員	B	Ⅲで述べたように、もっと開かれた施設として認知される努力を望みたい。
寺崎委員	B	—

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

河合委員長	評価委員会も開催の年数を重ね、（評価に対する）問題点については、その都度改善の対応を行い、総じて偏りにない評価を出すことが出来たと思う。むろん機構運営にあたっての問題は、少なからず残っていると思うが、時代に合う着実な改善の道を歩んでいることは確かであると言いたい。
小笠原委員	特にありません。
坂本委員	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでは委員会の運営がわかりづらく違和感がありましたので、今期から変更されたのは改善に近づいたと考えます。各部会での議論も開示していただき、納得感がありました。今後も課題があれば、そのたびに改善をしていただけることを望みます。 ・19年度は京都のI COM、20年度は東京オリンピック・パラリンピックとグローバルな動きが加速します。タブレットやアプリを活用するなどして、多言語、多文化対応を向上してください。
名児耶委員	<p>研究所の立派な報告書等、利用者が今後その存在により、各種研究に役立つ点で評価できるが、それがもっと一般研究者や多くの博物館施設に認知、活用されることを期待する。</p> <p>現在の状況から、全体に感じられることは、活動の幅が広く、職員がギリギリの状態で対応しているように感じられる。もっと人員、予算に余裕があるよう状況で、運営されることで、より一般人に共感をよぶ活動が生まれるのではないかと考える。一朝一夕にできないことでも、少しずつでも努力がなければ先に進まないだろうと思う。</p>
寺崎委員	外部評価委員会の開催の仕方について、研究所・センター部会からいくつかの意見が出された。それらを参考に、今後も引き続き検討していつてもらいたい。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 河合 正朝		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
	B	B	B	—	—
【委員コメント】 当初の目標を十分に達成しており、博物館・研究所・センターには、それぞれに工夫と努力のあとが窺える。以前から主張してきたことであるが、評価の評定区分を明示することで、公表に際して、この評価の公平性、客観性、明瞭性などが担保されることになると考えるので良いことと思う。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価 B	委員評価	【委員コメント】 各館それぞれに特徴をもったやり方（対応法）に従って年度目標を手堅く達成したものと評価する。限られた予算のなかで、多様かつ充実した展示を行うためには収蔵品の充実が極めて重要である。限られた予算で作品の購入に難渋するのであれば、寄贈品、寄託品の受け入れは有効である。民間にある文化財の保存、次世代への継承にも寄与することになる。次の課題は、寄贈・寄託者、特に寄贈者に対する顕彰方法を検討すべきと思う。例えば税の優遇など。			
	A	【委員コメント】 各館とも努力の結果として目標を超える入場者を獲得しており、日ごろの研究成果を生かす企画力の高さや展示の工夫によって観覧者の十分な満足を得たと評価出来る展覧会も少なくなかった。一方、入場者数の多さを評価判断の拠り所として、内部評価をSにすることにはやや抵抗感を感じる。ただこのような皮相的な判断によるものではないと思うので、例えば、内部評価はAとし、コメントにおいてその展覧会における鑑賞者の満足度、学術的な特段の寄与などを主張することによって、わたしたち外部評価委員がSをつけるというのも何かスマートな感があるのではと思考する。			
(2) 展覧事業					
B	委員評価	【委員コメント】 各館が独自に立てたプログラム（企画）が、それぞれに定着して来たように思われる。さらに将来を見据えた若年層に対する多様な対応も検討、実施されていると思われるなど、各館とも評価すべき点は少なくない。博物館・美術館における教育。普及活動の充実は、今後の大きな課題であり、ナショナルセンターである当機構の各博物館は、そのリーダーシップをとることが期待される。			
	A	【委員コメント】 各館が独自に立てたプログラム（企画）が、それぞれに定着して来たように思われる。さらに将来を見据えた若年層に対する多様な対応も検討、実施されていると思われるなど、各館とも評価すべき点は少なくない。博物館・美術館における教育。普及活動の充実は、今後の大きな課題であり、ナショナルセンターである当機構の各博物館は、そのリーダーシップをとることが期待される。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 各館が独自に立てたプログラム（企画）が、それぞれに定着して来たように思われる。さらに将来を見据えた若年層に対する多様な対応も検討、実施されていると思われるなど、各館とも評価すべき点は少なくない。博物館・美術館における教育。普及活動の充実は、今後の大きな課題であり、ナショナルセンターである当機構の各博物館は、そのリーダーシップをとることが期待される。			
	A	【委員コメント】 各館が独自に立てたプログラム（企画）が、それぞれに定着して来たように思われる。さらに将来を見据えた若年層に対する多様な対応も検討、実施されていると思われるなど、各館とも評価すべき点は少なくない。博物館・美術館における教育。普及活動の充実は、今後の大きな課題であり、ナショナルセンターである当機構の各博物館は、そのリーダーシップをとることが期待される。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 博物館事業のいわば要であるこれらの事業を着実に実行し、成果を上げるためには、調査研究が不可欠であり、これを避けることは出来ない。研究員の調査研究のための時間とそれを担保出来る資金の調達も肝要であろう。外部協力者や外部資金の導入などの検討が必要となろう。			
	A	【委員コメント】 博物館事業のいわば要であるこれらの事業を着実に実行し、成果を上げるためには、調査研究が不可欠であり、これを避けることは出来ない。研究員の調査研究のための時間とそれを担保出来る資金の調達も肝要であろう。外部協力者や外部資金の導入などの検討が必要となろう。			

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
A	委員評価	【委員コメント】 文化財活用センターの設置が、このことへの対応処置と判断されるが、「保存のための活用という観点」を持つ、わたしにとっては、当該センターの活動については引き続き注視していきたい。一方、無論、その活動に対しては、期待もしている。
	B	
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】 当初の目標に従って、着実に成果を上げているものと評価する。情報の公開や海外との研究交流に実を上げていることが、発行された報告書等によって示されていると思う。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 名見耶委員の指摘されるように、一般人には研究所の活動は確かに解かり難い。しかし、むしろそれがこの種の研究所の研究の特徴でもあり、地道な研究成果の蓄積こそ肝要である。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】 三機関はそれぞれの努力によって当初の目標を達成したと評価するに十分である。しかしながら、世界、特にアジアの情勢（国勢・国情）は、多様に変化している。その変化を見据えた上での国際協働が今後の課題となろう。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 会議の際、東文研所長に確認したように、同研究所における売り立目録のデータベース化とその公開は、日本美術史研究に多大な貢献をしたことを特記したい。他研究所やセンターも同様であろうと思うが、とかく日本人研究者が軽視しがちな、アーカイブ、レゾネなどのデータベースは、諸研究の基礎でありその集積の責めを負う、研究所の存在は今後も重要である。こうした地道な努力を続ける、それが正当に評価されることが望まれる。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	【委員コメント】 研究者に対する研修や協力は十分に行われており、研究所・センターに課せられた責めは十分に果たしていると評価する。しかし、わたしの個人的な懸念は、地方公共団体の文化財担当、あるいは文化振興に携わる事務系職員の文化財に対する理解や保護意識の低さに、研究系職員は難渋しているように見える。この部分における対応は出来ないものだろうか。検討課題として残したい。
〔法人共通業務〕		
II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 目標を立て、それを実行・実現するための工夫と努力のあとが認められ、表記の評価になった。引き続き努力や工夫の継続が望まれる。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 自己収入の増加とともに、外部資金の導入・確保については引き続き努力をして欲しい。企業や個人による寄付などの協力を得るには、一方で国民の寄付意識の向上が望まれる。
Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】 妥当な判断と経営努力によって、目標を達成したと評価できる。 ここ項目では人件費の問題は上がってくると思うが、現状では容認せざるを得ない努力のあとを認めたい。
Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 各委員がしばしば発言しているように、機構の健全・確実な運営や教育、研究活動の進展は、優秀な人材の確保にあることは言うまでもない。しかし他方では限られた人件費や研究員に与えられた研究時間の圧縮（業務の多様化による負担増）などの問題にも未解決部分が少なくない。これらについては短期的でなく、中期的な解決課題として取り組んで欲しい。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 評価委員会も開催の年数を重ね、（評価に対する）問題点については、その都度改善の対応を行い、総じて偏りにない評価を出すことが出来たと思う。むろん機構運営にあたっての問題は、少なからず残っていると思うが、時代に合う着実な改善の道を歩んでいることは確かであると言いたい。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
A：所期の目標を上回る成果が得られている
B：所期の目標を達成している※
C：所期の目標を下回っており、改善を要する
D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 小笠原 直		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
	B	B	B	—	—
【委員コメント】 全体的に所期の目標を達成している。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】			
B	B				
(2) 展覧事業					
	委員評価	【委員コメント】 平常展については、九博が目標未達であるが、東博で目標を大きく超えていることで順調に推移したこと、及び特別展についても東博の「縄文」や「顔真卿」京博の「京のかたな」など、軒並み目標来館数を上回っており、前年度実績を下回るものの、有形文化財を活用した歴史・伝統文化の内外への発信としては所期の目標を上回る成果が得られていると評価する。後掲の「自己収入の拡大」のA評価につながるものであり、持続可能性の観点からも高く評価する。			
B	A				
(3) 教育・普及活動					
	委員評価	【委員コメント】 親と子のギャラリーや文化財に親しむ授業、日本文化体験補助などの教育・普及活動等においては、大きな成果が得られたものと評価する。			
B	B				
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
	委員評価	【委員コメント】			
B	B				
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
	委員評価	【委員コメント】 東博の国内向けが牽引したことが寄与し、国内外への収蔵品及び寄託品の貸与件数が伸長している。			
A	A				

〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	海外との関連機関との研究協議の成果が得られている。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	国際的な協働を全方位的に実施し、文化遺産保護に貢献していると高く評価する。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	【委員コメント】
	A	地方公共団体に対する文化財に関する協力・助言等及び文化財防災体制について多方面にわたる積極的な対応を評価する。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	内部統制委員会やリスク管理委員会の開催頻度のアップや内部監査室の専任職員配置等内部統制体制を強化している。当該内部監査室も、監査要点に併せて、各博物館、研究所にも往査している実績がある。
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	自己収入について、目標額を上回る成果を安定的に上げていること及び外部資金の獲得も安定していることは高く評価する。一方、運営交付金収益割合は上がっている。

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】 安定している。
	B	
V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 優秀な人財確保は、事業継続に不可欠な要点であるが、今年度については、前年度以上に適材適所に確保ができていると考える。
	B	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 特にありません。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
坂本 弘子					
全体評価	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
	B	B	B	—	—
【委員コメント】 全体として、限られた要員や予算のなかで工夫を重ねておられると考えます。5G時代が到来しますが、リアルな文化財が持つ力を広く社会に発揮し、訴求していただけるよう機構には切に期待します。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】 急激に成果が拡大する類いの活動ではないでしょうから、将来にむけて情報収集を重ねてください。			
B					
(2) 展覧事業					
	委員評価	【委員コメント】 全体の来館者数が前年比マイナスですが、縄文展や「京のかたな」展など注目を集めた特別展もありA評価に値します。ただし部会評価委員会でも指摘があったように、正倉院展の仮設トイレには常に違和感を覚えます。定例の催事であるならば、それを見込んだ環境整備をするべきではないでしょうか。			
A					
(3) 教育・普及活動					
	委員評価	【委員コメント】 外国人対象のプログラムや若年層（子ども・学生）ターゲットの企画など、工夫が凝らされていると考えます。			
B					
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
	委員評価	【委員コメント】 山城鍛冶の調査研究（京博）や、南都古代・中世の彫刻に関する調査研究（奈良博）など、意欲的な取り組みがいくつもありました。			
B					
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
	委員評価	【委員コメント】 創設された文化財活用センターとの連携により、これまで以上に館外との協力が進展しており、減少傾向にあった作品貸与件数が大きく伸びたことを評価します。			
A					
〔研究所・センター業務〕					

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】 少子高齢化による担い手不足や地域の過疎化、自然災害などにより、無形文化財は常に危機にさらされています。保護・活用にご尽力ください。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 廉価な機器を改良して文化財の調査に活用できる手法を確立し、従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録ができるとのこと。今後の普及が注目されます。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	B 委員評価	【委員コメント】 グローバル化が進む現代、アジア地域などとの連携・協力について内外から期待が高まっています。限られた条件下であることは理解していますが、さらに推進していただきたく要望します。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	【委員コメント】 文化財活用センターに相談窓口を設けるなど、迅速な助言、援助が可能になりました。さらに取り組みを強化されることを期待します。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 計画通り進んでいるものと判断します。
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	A 委員評価	【委員コメント】 自己収入の拡大においては毎年目標額を上回っており、また今年度は外部資金の獲得も前年比プラスの結果となりました。保有資産の活用にも工夫が凝らされていると感じます。

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】
V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 外部評価委員の運用について、委員から挙げた意見を真摯に検討していただいたと感じています。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでは委員会の運営がわかりづらく違和感がありましたので、今期から変更されたのは改善に近づいたと考えます。各部会での議論も開示していただき、納得感がありました。今後も課題があれば、そのたびに改善をしていただけることを望みます。 ・ 19年度は京都のI COM、20年度は東京オリンピック・パラリンピックとグローバルな動きが加速します。タブレットやアプリを活用するなどして、多言語、多文化対応を向上してください。 		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
A：所期の目標を上回る成果が得られている
B：所期の目標を達成している※
C：所期の目標を下回っており、改善を要する
D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
- ※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 名児耶 明		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
	B	B	B	—	—
【委員コメント】全体として、運営、活動は一定の成果を維持している点で評価できる。この維持することが重要で、地道な活動を維持するための人材や予算の確保についての努力に敬意を払いたいが、今後の海外からの来館者の急増に対応した、多言語対応については、館内での案内等さらなる工夫が必要な時期にきていると思われ、これらも日常的業務として根づくことを期待したい。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価 B	委員評価	【委員コメント】新規購入や寄贈、寄託品の受入れも順調と判断できる。より積極的 に取り組み、既存資料を補填して充実した平常陳列の構築を望む。特に目立つ事 業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命である。			
(2) 展覧事業					
A	委員評価	【委員コメント】 他の委員の意見にもあるように来館者を集めた特別展が多かったことは事実であり、各館の努力に敬意を表したい。一方、長い行列のできることは、一つの象徴であるが、特別展における観覧者への様々な対応は、今後の課題でもあろう。 また、努力は感じられたが、増加する外国人へのさらなる対応も重要であろう。 観覧者数ばかりではなく、展示の目的が伝わっていたかを、来館者から確認することも重要と思う。特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示をじっくりと取り組むことも必要かと思う。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 各館のさまざまな活動が広がりを見せている点が評価できる。特に博物館活動の中でも、若年層への教育・普及活動は、将来を考えても重要であると思うが、かなり成果を挙げていると思う。人材確保や時間確保など、さらなる発展も考えてほしい。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 博物館活動での調査研究が、特別展の忙しさのための研究活動が制限されないことを期待する。とくに、長く保管していながら、まだ手付かずの文化財のさらなる研究も進めてほしい。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
A	委員評価	【委員コメント】 概ね順調に、各館のできる範囲での最大限の活動を展開していると判断できる。			

〔研究所・センター業務〕

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

A	委員評価	【委員コメント】 一般人には、研究所での活動が伝わりにくが、報告書の通り、着実に成果を挙げていると判断できる。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

A	委員評価	【委員コメント】 これも一般人には、研究所での活動が伝わりにくが、成果を挙げていると判断できる。文化財のために年代測定など、研究の基本となるデータの集積を着実に進めていることは、継続しているだけでも重要であるので、それを維持してほしい。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

A	委員評価	【委員コメント】 この活動も文化財を維持していく上で重要であることは当然だが、研究の継続もこのまま続けてほしい。継続しているだけで、評価されると思う。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

A	委員評価	【委員コメント】 研究の成果を公開していることが評価できる。これも地道な活動であるが、時には博物館と共同での公開を考えても良いかと思う。

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

B	委員評価	【委員コメント】 広範囲な研究成果をもとに全国の関係団体への助言と継続する対応等の活動が評価できる。Aに近いBとしても良いと思う。

〔法人共通業務〕

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

B	委員評価	【委員コメント】 現在の目標達成を評価できるが、これを維持するには、人材確保等に余裕が持てる状態が望ましい。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

B	委員評価	【委員コメント】 予算確保は難しいことではあるが、博物館や研究所が国民にとってもっと身近な存在で、企業や個人からの寄付などの協力を得やすい状況を少しずつ積み上げることができれば理想的だと思う。

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】経営努力は評価できるが、これがAとなることはできないであろう。現状維持ができることが一番大切であろう。
V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 Ⅲで述べたように、もっと開かれた施設として認知される努力を望みたい。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】研究所の立派な報告書等、利用者が今後その存在により。各種研究に役立つ点で評価できるが、それがもっと一般研究者や多くの博物館施設に認知、活用されることを期待する。</p> <p>現在の状況から、全体に感じられることは、活動の幅が広く、職員がギリギリの状態に対応しているように感じられる。もっと人員、予算に余裕があるよう状況で、運営されることで、より一般人に共感をよぶ活動が生まれるのではないかと考える。一朝一夕にできないことでも、少しずつでも努力がなければ先に進まないだろうと思う。</p>		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

<p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p>
--

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
寺崎 保広					
全体評価	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
	B	B	B	—	—
【委員コメント】					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】 九国博による有形文化財の収集・寄贈・寄託品の受入が大きく伸長した点が特筆される。他の博物館も着実に運営されていると考える。			
B					
(2) 展覧事業					
	委員評価	【委員コメント】 「顔真卿」（東博）、「春日大社のすべて」（奈良博）、「初公開！天皇の即位図」（京博）など、内容の充実した印象深い特別展・特集展示が多く開催された。来館者数の多寡・達成率よりも展示の質の高さと来館者の満足度の方を優先して評価すれば、A評価が妥当と考える。			
B	A				
(3) 教育・普及活動					
	委員評価	【委員コメント】 「学習機会の提供」という点で、各館の努力により、講座やプログラムへの参加者が大きく増えている点が評価される。			
B					
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
	委員評価	【委員コメント】 各館ともに展示業務が多忙な中で、調査研究を着実に継続し、成果をあげている点に敬意を表したい。			
B					
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
	委員評価	【委員コメント】 総合的に見て、A評価が妥当であると考えます。			
A					

〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】 研究成果・情報公開・海外との連携、いずれも十分な成果をあげていると認められる。研究所・センター部会委員からはS評価の意見もあったが、全体としてはA評価が妥当であろう。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 両研究所ともに、従来より積極的に科学技術を取り入れて、調査研究に応用し、文化財研究を推進してきたが、今年度も十分な実績をあげたものと評価できる。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】 三機関ともに国際協働に取り組み、技術支援・人材育成・情報交換を行っており、その成果も着実にあがっているものと判断される。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 報告書の刊行、データベースの作成・更新、講演会開催など、継続事業ではあるが、成果の公開・活用としては十分であると思われる。特に奈文研のデータベースへのアクセス数が900万件を超えるというのは特筆され、今後もデータの充実につとめてもらいたい。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	【委員コメント】 両研究所による各種研修・助言・調査協力は、順調に進められていると判断される。また、本部事務局の文化財防災ネットワーク推進室の活動も高く評価される。ただし、個々の事業毎の評価を積み上げていけば、全体としてはB評価が妥当であろう。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】
V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <p>外部評価委員会の開催の仕方について、研究所・センター一部会からいくつかの意見が出された。それらを参考に、今後も引き続き検討していってほしい。</p>		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（博物館部会）

まとめ

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	報告の通りと判断できる。特に目立つ事業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命であるので、今後も着実に維持してほしい。
浜田 副部会長	B	地方公立博物館の相次ぐ閉館や、社寺管理者の高齢化に伴う文化財保管の困難化の問題は、相変わらず深刻である。国立博物館は、こうした文化財が海外や民間へ流出することを防ぎ、国・地方の宝を守るため、従来にも増して、積極的に収集を進める必要に迫られている。今後も、相応の資料収集のための予算とともに、収蔵スペースを確保することは欠かせない課題である。
小松委員	B	各施設とも、着実に目標に向かって努力を重ねていると認められる。特に東京国立博物館においては、保管する作品の件数が多い分、作業量も膨大になるので、今後、担当部署の人員を増やすなど、適切に対応していくことが望ましい。
栄原委員	B	・有形文化財の購入、寄贈・寄託件数、修理件数はいずれも堅調に推移しており、評価できる。とくに寄贈・寄託は所蔵者と各館および各館担当者との信頼関係のあかしであるので、それが堅調なことは喜ばしい。 ・購入の決算額は示されているが、修理についてはそれが明示されていない。修理は文化財の次代への継承の観点からきわめて重要であるので、十分な予算措置が講ぜられることを望みたい。
榊原委員	B	収集の実を上げるため購入費の増額を図ることは必須だが、寄託品の充実もそのための方策の一つだろう。その意味で注目すべきは京博・奈良博に比べ東博の寄託品が決定的に少ない点である。社寺からの寄託品の有無、多寡がこの差となっているのだろう。となれば、東博のとるべき方法は個人からの寄託の充実を目指すべきか。
(2) 展覧事業		
自己点検評価 B 委員評価 A		
名児耶 部会長	委員 評価 B	必ずしも入館者数で判断すべきではなく、展示の目的が伝わっていたかを、来館者から確認し、その成果での評価も重要と思う。確認のための手段には工夫が必要かと思う。特別展はもう少し減らして、一つ一つの展示をじっくりと取り組むことも必要かと思う。
浜田 副部会長	A	東京国立博物館の「縄文」展、京都国立博物館の「京のかたな」展など、話題となる特別展が開催され、多くが目標値を大きく超える入館者を迎えることが出来た。もちろん、博物館の評価は数量でされるべきではないが、新たな利用者層の獲得など、博物館にとっての効果は大きいものであったと評価できる。
小松委員	A	それぞれの館で特色ある特別展が開催されており、それが結果として集客に結びついていると評価できる。観覧者の志向、動向は予測が困難なので、今後ともさまざまな試みをしていくことが必要になるだろう。また、いわゆる平常陳列を重視する姿勢は各館に共通しており、今後もこの方針を堅持してほしいと思う。
栄原委員	A	・平常展の満足度評価の京都国立博物館と奈良国立博物館は満足度が高く、かつ29年度と比べて上昇している（「自己点検評価報告書」、以下「自己」41 ページ）、それぞれ A 評価とすべきである。これによると館ごとの A 評価が多くなり、かつ26年度からおおむね上昇傾向にあるので、「年度計画に対する総合評価」「中期計画に対する評価」はともに A 評価とするのが妥当である。 ・平成30年度の特別展では「縄文」「顔真卿」（東京国立博物館）、「京のかたな」（京都国立博物館）、「春日大社のすべて」（奈良国立博物館）、「至上の印象派展」（九州国立博物館）など内容の質の高さ、来館者数、満足度などから総合的に S 評価とされているのは大いに妥当である。また各館いずれにも S 評価があることも評価される。上記の平常展の評価と相まって、展覧事業全体の総合的な評価は A 評価としうるのではないかと。特に「京のかたな」展では来館者の大半を若年女性層が占め、教育・普及活動における関連講演会の参加者も若い層が大幅に増えたとのことで、様々な広報の手法を活用しての成果（「自己」55

		<p>ページ) であるとされていることは注目される。これらの層の定着を図ることが重要である。また、今後の新たな来館者の掘り起こしのヒントがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良国立博物館「糸のみほとけ」展(「自己」57ページ)は満足度が95.9%と非常に高く、かつ質も高くネーミングもよい。技法研究やワークショップへの波及効果も評価できる。来館者数のC評価を考慮してか「年度計画に対する総合評価」をBとしているが、年度計画では満足度の高い特別展をめざすことを主としており、来館者数も目標値の9割に達しているため、A評価として差し支えない。この例にみられるように、自己評価が来館者数を意識しすぎる気配が感じられる。特別展は多くの要素から成り立っており、来館者数が重要な要素ではあることは確かであるが、そのみに偏って評価がなされるべきではないと考える。 ・各館ともインバウンドの増加を意識して、展示解説、リーフレット、音声ガイドの多言語化、外国語対応スタッフの充実、ユニバーサルデザインの導入などを積極的に進められていることは評価できる。しかし、欧米・中韓台湾に重きが置かれるのは、現状からみて妥当であるが、将来タイをはじめとする東南アジア方面からの入館者が増加する可能性が高いので、これに対する対応も準備を進めていただきたい。 ・展示解説における多言語対応には、言語数的に限界があり、将来の技術革新を見据えた対応が必要である一方、博物館の使い方についての情報提供はさらに対応度を高める必要があると考える。この点で、閉室案内サイン・券売機の高言語化(京都国立博物館)・誘導サインの見直し(奈良国立博物館)等は評価できる。一方、緊急時における外国人の避難誘導等の対応については、各館の事情に合わせて対応を強化していただきたい。 ・外国人を対象とする観覧環境についての満足度は、各館ともC・D評価になっている(「自己」70~73ページ)。上記のように各館とも外国人観覧者に対する対応について大いに努力していることとの関係について、掘り下げた分析が必要であると考え。
榊原委員	B	自己評価と同評価にしたが、個別の展覧会に限れば、「糸のみほとけ」展や「池大雅」展などはAをつけたい。いずれも自己評価Bだが、これは来館者数が目標値に届かず、評価がCであったことに起因すると思われるが、両展の内容の充実度からすれば、Aでもよいのでは。
(3) 教育・普及活動		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名見耶 部会長	委員 評価 B	博物館活動の中でも、若年層への教育・普及活動は、将来を考えても重要であると思うが、かなり成果を挙げA評価に近いと思うが、さらなる発展も考えてほしい。
浜田 副部会長	B	東博や京博の公式キャラクターの活用は、国立博物館のイメージのソフト戦略として、より多くの国民の博物館への関心が高まることを期待したい。また、百貨店とのコラボレーションによるギフトの製作・販売についても、博物館の新たな認知度の向上と、顧客の開拓につながるものと評価出来る。
小松委員	B	成果が形として見えにくい分野だが、各施設ともにさまざまに工夫を凝らして目標の達成に努力していると評価できる。今後、SNSなどへの対応がさらに重要になっていくと思われ、その分野に通曉した人材の確保が必要となるのではないかと。
栄原委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各館とも講演会・シンポジウムなどを特別展などと連動して着実に進めていて評価できる。これらは比較的専門性の高い文化的教養・研究成果を提供する基礎的活動というべきものである。多くの幅広い参加者を獲得して教育・普及のすそ野を広げる方向は重要であるが、そればかりでなく、文化に対する来館者の深い理解を得ることを目指す方向も重要である。その両方が相まって、国立博物館群に対する国民の支持が得られ、その基礎の上に各館独自の活動が効果的に展開しうるものとする。 ・東京国立博物館の外国人来館者をメインターゲットとする「日本文化との出会い」、「トーハク×びじゅチューン」「日本文化体験」、広く来館者全体を意識した京都国立博物館の「さわって発見!ミュージアム・カート」、九州国立博物館の「なりきり考古学者」などの体験型プログラムの充実が注目される。 ・上述のように、京都国立博物館の特別展「京のかたな」関係の各種講座への20代30代の若い年代の参加者が約6割を占めた(「自己」78ページ)ことは注目される。この層の今後の定着が重要である。

榊原委員	C	各展それぞれボランティア制度の充実を教育普及活動の根幹に置いているようで、それはそれで高く評価するが、各館学芸員自身がもっともっと教育普及の現場に立ち、来館者と直接向き合うべきではないか。
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	博物館活動での調査研究が、特別展の忙しさのための研究活動が制限されないことを期待します。とくに、長く保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。
浜田 副部会長	B	2019年9月開催のICOM（国際博物館会議）日本（京都）大会は、我が国の博物館及び博物館学の歴史の上で、記念すべきイベントであり、事務局となる京博はもとより、国立各館には一層の尽力を願いたい。
小松委員	A	日常の業務が多忙をきわめる中、多岐に亘る調査・研究が行われていることに敬意を表したい。今後とも外部資金の獲得に努めるなどして、充実した調査・研究活動が継続されるよう期待する。
栄原委員	B	<ul style="list-style-type: none"> 各館とも収蔵品、展覧事業にかかわる有形文化財の基礎的調査を着実に進めており評価できる。東京国立博物館の儒教関係絵画作品・平安仏画・能楽関係資料・東寺収蔵品・三国志関係資料、京都国立博物館の松井コレクション陶磁器・知恩寺所蔵品・京狩野作品・京のかたな展関係資料・時宗関係資料、奈良国立博物館のおん祭江戸時代史料群、九州国立博物館のマルセル・デュシャン作品の各調査は、いずれもS・A評価として妥当である。 九州国立博物館が継続して行っている高等学校所蔵歴史資料の調査と、それをフォーラム、名品展に結び付ける事業は、資料の再評価・未知の資料の発掘などの点で重要なばかりでなく、その関係者（在校生・卒業生）の関心を深める点でも重要である。彼らは将来の来館者のコアな予備軍と考えられるので、この事業の継続を期待したい。
榊原委員	A	調査研究は収集、寄託、展覧会事業など博物館活動すべてにわたって質の向上を担保するための基礎となるべきもので、さらなる充実を図りたい。当然そのための経費の増額が必要だろう。
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 A 委員評価 A		
名児耶 部会長	委員 評価 A	おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしてと思われる。
浜田 副部会長	A	博物館「冬の時代」と言われて久しいが、当機構が地方公共団体等に果たす役割はより大きくなっており、全国の文化財担当者や、博物館学芸員に対する技術研修の更なる促進に期待したい。今後は、学芸員に対する研修の体系化を図ることが課題と思われる。
小松委員	A	国内外ともに展覧会の規模が大きくなり、数も増えている。そういった状況のなかで、文化財機構の各施設が果たす役割はさらに大きくなっていくだろう。現状では、その負託に充分に対応していると評価できる。
栄原委員	A	<ul style="list-style-type: none"> 文化財活用センターと東京国立博物館との共同事業である同館収蔵品の貸与促進事業は、輸送料・保険料・旅費等の補助を伴うものであり、予算の厳しい小規模地方館にとっては、かなり有効な事業と考えられるので、S評価（「自己」212ページ）は妥当である。しかしこの制度の存在は次第に知られつつあるもののなお十分ではないと思われるので、一層の周知をお願いしたい。また東京国立博物館以外の他館の収蔵品にも対象を拡大していくことが望まれる。それとともに今後多くのニーズが掘り起こされてくる可能性が高いので、予算の拡充をお願いしたい。
榊原委員	A	地方への出前展の充実を望む。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
名児耶 部会長		文化財活用センターの積極的周知が望まれる。
浜田 副部会長		国立博物館各館の真摯な取り組みに敬意を表したい。国民に、より親しみが持てる国立博物館づくりを目指して、今後も引き続き、地道な活動を一つ一つ積み上げていって欲しい。昨年も述べたが、こうした地道な活動の上に、国民の文化が成り立っているということを国（政府）が理解し、積極的財政的支援がなされることを期待したい。

	<p>また博物館は、100年後、1000年後を見据えた文化財の収集と保存を行っている機関であることを忘れず、目先の観光振興のために文化財を消耗させ、経済振興のために文化財を消費することは、あってはならないということを肝に銘じてほしい。</p>
小松委員	<p>自己点検評価報告書を通観すると、文化財機構各施設の活動が、以前とは比較にならないほど幅広いものになっていることに気づかされる。その分、マンパワーの増強も必要と思われるが、残念ながら現状ではそうはなっていない。今後は、業務内容を見直し、整理するとともに、それらを担当する人員の確保に努力していただきたいと思う。</p>
栄原委員	<p>・自己評価につき、各館とも自制的かつ慎重・率直に評価しており好感が持てるが、「年度計画に対する総合評価」「中期計画に対する評価」の両方とも、S・A評価の比率が低い場合がある。「年度計画に対する総合評価」では(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承、「中期計画に対する評価」については(1)同、(2)展覧事業、(3)教育・普及活動、(5)国内外の博物館活動への寄与、の各項について1割を割るか1割前後にとどまっている。このままでは全体として前年度と同程度で推移したと解釈されかねないので、もう少し比率を上げることを検討していただければ幸いである。</p>
榊原委員	<p>部会でも発言したが、正倉院展での仮設トイレの件、そろそろ仮設でその場をしのぐみっともない光景はやめたらどうか。根本的な対策を模索すべきだろう。ことは仮設トイレの問題に限らない。</p>

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
名児耶 明		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】 報告の通りと判断できる。特に目立つ事業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命であるので、今後も着実に維持してほしい。
B		
(2) 展覧事業		
	委員評価	【委員コメント】 必ずしも入館者数で判断すべきではなく、展示の目的が伝わっていたかを、来館者から確認し、その成果での評価も重要と思う。確認のための手段には工夫が必要かと思う。特別展はもう少し減らして、一つ一つの展示をじっくりと取り組むことも必要かと思う。
B		
(3) 教育・普及活動		
	委員評価	【委員コメント】 博物館活動の中でも、若年層への教育・普及活動は、将来を考えても重要であると思うが、かなり成果を挙げA評価に近いと思うが、さらなる発展も考えてほしい。
B		
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
	委員評価	【委員コメント】 博物館活動での調査研究が、特別展の忙しさのための研究活動が制限されないことを期待します。とくに、長く保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。
B		
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
	委員評価	【委員コメント】 おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしてと思われる。
A		
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		

【委員コメント】

文化財活用センターの積極的周知が望まれる。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名		<p>※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。</p> <p>また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。</p>
浜田 弘明		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価	委員評価	<p>【委員コメント】地方公立博物館の相次ぐ閉館や、社寺管理者の高齢化に伴う文化財保管の困難化の問題は、相変わらず深刻である。国立博物館は、こうした文化財が海外や民間へ流出することを防ぎ、国・地方の宝を守るため、従来にも増して、積極的に収集を進める必要に迫られている。今後も、相応の資料収集のための予算とともに、収蔵スペースを確保することは欠かせない課題である。</p>
B		
(2) 展覧事業		
	委員評価	<p>【委員コメント】東京国立博物館の「縄文」展、京都国立博物館の「京のかたな」展など、話題となる特別展が開催され、多くが目標値を大きく超える入館者を迎えることが出来た。もちろん、博物館の評価は数量でされるべきではないが、新たな利用者層の獲得など、博物館にとっての効果は大きいものであったと評価できる。</p>
B	A	
(3) 教育・普及活動		
	委員評価	<p>【委員コメント】東博や京博の公式キャラクターの活用は、国立博物館のイメージのソフト戦略として、より多くの国民の博物館への関心が高まることを期待したい。また、百貨店とのコラボレーションによるギフトの製作・販売についても、博物館の新たな認知度の向上と、顧客の開拓につながるものと評価出来る。</p>
B		
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
	委員評価	<p>【委員コメント】2019年9月開催のICOM（国際博物館会議）日本（京都）大会は、我が国の博物館及び博物館学の歴史の上で、記念すべきイベントであり、事務局となる京博はもとより、国立各館には一層の尽力を願いたい。</p>
B		
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
	委員評価	<p>【委員コメント】博物館「冬の時代」と言われて久しいが、当機構が地方公共団体等に果たす役割はより大きくなっており、全国の文化財担当者や、博物館学芸員に対する技術研修の更なる促進に期待したい。今後は、学芸員に対する研修の体系化を図ることが課題と思われる。</p>
A		
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】国立博物館各館の真摯な取り組みに敬意を表したい。国民に、より親しみが持てる国立博物館づくりを目指して、今後も引き続き、地道な活動を一つ一つ積み上げていって欲しい。昨年も述べたが、こうした地道な活動の上に、国民の文化が成り立っているということを国（政府）が理解し、積極的財政的支援がなされることを期待したい。</p> <p>また博物館は、100年後、1000年後を見据えた文化財の収集と保存を行っている機関であることを忘れず、目先の観光振興のために文化財を消耗させ、経済振興のために文化財を消費することは、あってはならないということを肝に銘じてほしい。</p>		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|---|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p><u>B：所期の目標を達成している※</u></p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|---|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
小松 大秀		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】 各施設とも、着実に目標に向かって努力を重ねていると認められる。特に東京国立博物館においては、保管する作品の件数が多い分、作業量も膨大になるので、今後、担当部署の人員を増やすなど、適切に対応していくことが望ましい。
B		
(2) 展覧事業		
	委員評価	【委員コメント】 それぞれの館で特色ある特別展が開催されており、それが結果として集客に結びついていると評価できる。観覧者の志向、動向は予測が困難なので、今後ともさまざまな試みをしていくことが必要になるだろう。また、いわゆる平常陳列を重視する姿勢は各館に共通しており、今後もこの方針を堅持してほしいと思う。
B	A	
(3) 教育・普及活動		
	委員評価	【委員コメント】 成果が形として見えにくい分野だが、各施設ともさまざまに工夫を凝らして目標の達成に努力していると評価できる。今後、SNSなどへの対応がさらに重要になっていくと思われ、その分野に通暁した人材の確保が必要となるのではないかと。
B		
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
	委員評価	【委員コメント】 日常の業務が多忙をきわめる中、多岐に亘る調査・研究が行われていることに敬意を表したい。今後とも外部資金の獲得に努めるなどして、充実した調査・研究活動が継続されるよう期待する。
B	A	
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
	委員評価	【委員コメント】 国内外ともに展覧会の規模が大きくなり、数も増えている。そういった状況のなかで、文化財機構の各施設が果たす役割はさらに大きくなっていくだろう。現状では、その負託に充分に対応していると評価できる。
A		
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		

【委員コメント】

自己点検評価報告書を通観すると、文化財機構各施設の活動が、以前とは比較にならないほど幅広いものになっていることに気づかされる。その分、マンパワーの増強も必要と思われるが、残念ながら現状ではそうはなっていない。今後は、業務内容を見直し、整理するとともに、それらを担当する人員の確保に努力していただきたいと思う。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
 - A：所期の目標を上回る成果が得られている
 - B：所期の目標を達成している※**
 - C：所期の目標を下回っており、改善を要する
 - D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
- ※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名		<p>※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。</p> <p>また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。</p>
栄原永遠男		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 有形文化財の購入、寄贈・寄託件数、修理件数はいずれも堅調に推移しており、評価できる。とくに寄贈・寄託は所蔵者と各館および各館担当者との信頼関係のあかきであるので、それが堅調なことは喜ばしい。 購入の決算額は示されているが、修理についてはそれが明示されていない。修理は文化財の次代への継承の観点からきわめて重要であるので、十分な予算措置が講ぜられることを望みたい。
B		
(2) 展覧事業		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平常展の満足度評価の京都国立博物館と奈良国立博物館は満足度が高く、かつ29年度と比べて上昇しているので（「自己点検評価報告書」、以下「自己」41ページ）、それぞれA評価とすべきである。これによると館ごとのA評価が多くなり、かつ26年度からおおむね上昇傾向にあるので、「年度計画に対する総合評価」「中期計画に対する評価」はともにA評価とするのが妥当である。 平成30年度の特別展では「縄文」「顔真卿」（東京国立博物館）、「京のかたな」（京都国立博物館）、「春日大社のすべて」（奈良国立博物館）、「至上の印象派展」（九州国立博物館）など内容の質の高さ、来館者数、満足度などから総合的にS評価とされているのは大いに妥当である。また各館いずれにもS評価があることも評価される。上記の平常展の評価と相まって、展覧事業全体の総合的な評価はA評価としうるのではないかと。特に「京のかたな」展では来館者の大半を若年女性層が占め、教育・普及活動における関連講演会の参加者も若い層が大幅に増えたとのことで、様々な広報の手法を活用しての成果（「自己」55ページ）であるとされていることは注目される。これらの層の定着を図ることが重要である。また、今後の新たな来館者の掘り起こしのヒントがある。 奈良国立博物館「糸のみほとけ」展（「自己」57ページ）は満足度が95.9%と非常に高く、かつ質も高くネーミングもよい。技法研究やワークショップへの波及効果も評価できる。来館者数のC評価を考慮してか「年度計画に対する総合評価」をBとしているが、年度計画では満足度の高い特別展をめざすことを主としており、来館者数も目標値の9割に達しているため、A評価として差し支えない。この例にみられるように、自己評価が来館者数を意識しすぎる気配が感じられる。特別展は多くの要素から成り立っており、来館者数が重要な要素ではあることは確かであるが、そのみに偏って評価がなされるべきではないと考える。 各館ともインバウンドの増加を意識して、展示解説、リーフレット、音声ガイドの多言語化、外国語対応スタッフの充実、ユニバーサルデザインの導入などを積極的に進められていることは評価できる。しかし、欧米・中韓台湾に重きが置かれるのは、現状からみて妥当であるが、将来タイをはじめとする東南アジア方面からの
B	A	

		<p>入館者が増加する可能性が高いので、これに対する対応も準備を進めていただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展示解説における多言語対応には、言語数的に限界があり、将来の技術革新を見据えた対応が必要である一方、博物館の使い方についての情報提供はさらに対応度を高める必要があると考える。この点で、閉室案内サイン・券売機の高言語化（京都国立博物館）・誘導サインの見直し（奈良国立博物館）等は評価できる。一方、緊急時における外国人の避難誘導等の対応については、各館の事情に合わせて対応を強化していただきたい。 ・外国人を対象とする観覧環境についての満足度は、各館とも C・D 評価になっている（「自己」70～73 ページ）。上記のように各館とも外国人観覧者に対する対応について大いに努力していることとの関係について、掘り下げた分析が必要であると考える。
(3) 教育・普及活動		
B	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各館とも講演会・シンポジウムなどを特別展などと連動して着実に進めていて評価できる。これらは比較的専門性の高い文化的教養・研究成果を提供する基礎的活動というべきものである。多くの幅広い参加者を獲得して教育・普及のすそ野を広げる方向は重要であるが、そればかりでなく、文化に対する来館者の深い理解を得ることを目指す方向も重要である。その両方が相まって、国立博物館群に対する国民の支持が得られ、その基礎の上に各館独自の活動が効果的に展開しうるものと考えられる。 ・東京国立博物館の外国人来館者をメインターゲットとする「日本文化との出会い」、「トーハク×びじゅチューン」「日本文化体験」、広く来館者全体を意識した京都国立博物館の「さわって発見!ミュージアム・カート」、九州国立博物館の「なりきり考古学者」などの体験型プログラムの充実が注目される。 ・上述のように、京都国立博物館の特別展「京のかたな」関係の各種講座への 20 代 30 代の若い年代の参加者が約 6 割を占めた（「自己」78 ページ）ことは注目される。この層の今後の定着が重要である。
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
B	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各館とも収蔵品、展覧事業にかかわる有形文化財の基礎的調査を着実に進めており評価できる。東京国立博物館の儒教関係絵画作品・平安仏画・能楽関係資料・東寺収蔵品・三国志関係資料、京都国立博物館の松井コレクション陶磁器・知恩寺所蔵品・京狩野作品・京のかたな展関係資料・時宗関係資料、奈良国立博物館のおん祭江戸時代史料群、九州国立博物館のマルセル・デュシャン作品の各調査は、いずれも S・A 評価として妥当である。 ・九州国立博物館が継続して行っている高等学校所蔵歴史資料の調査と、それをフォーラム、名品展に結び付ける事業は、資料の再評価・未知の資料の発掘などの点で重要なばかりでなく、その関係者（在校生・卒業生）の関心を深める点でも重要である。彼らは将来の来館者のコアな予備軍と考えられるので、この事業の継続を期待したい。
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
A	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財活用センターと東京国立博物館との共同事業である同館収蔵品の貸与促進事業は、輸送料・保険料・旅費等の補助を伴うものであり、予算の厳しい小規模地方館にとっては、かなり有効な事業と考えられるので、S 評価（「自己」212 ページ）は妥当である。しかしこの制度の存在は次第に知られつつあるもののお十分ではないと思われるので、一層の周知をお願いしたい。また東京国立博物館以外の他館の収蔵品にも対象を拡大していくことが望まれる。それとともに今後多くのニーズが掘り起こされてくる可能性が高いので、予算の拡充をお願いしたい。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

【委員コメント】

・自己評価につき、各館とも自制的かつ慎重・率直に評価しており好感が持てるが、「年度計画に対する総合評価」「中期計画に対する評価」の両方とも、S・A評価の比率が低い場合がある。「年度計画に対する総合評価」では(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承、「中期計画に対する評価」については(1)同、(2)展覧事業、(3)教育・普及活動、(5)国内外の博物館活動への寄与、の各項について1割を割るか1割前後にとどまっている。このままでは全体として前年度と同程度で推移したと解釈されかねないので、もう少し比率を上げることを検討していただければ幸いである。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
榊原 悟		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】収集の実を上げるため購入費の増額を図ることは必須だが、寄託品の充実もそのための方策の一つだろう。その意味で注目すべきは京博・奈良博に比べ東博の寄託品が決定的に少ない点である。社寺からの寄託品の有無、多寡がこの差となっているのだろう。となれば、東博のとりべき方法は個人からの寄託の充実を目指すべきか。
B	B	
(2) 展覧事業		
B	委員評価	【委員コメント】自己評価と同評価にしたが、個別の展覧会に限れば、「糸のみほとけ」展や「池大雅」展などはAをつけたい。いずれも自己評価Bだが、これは来館者数が目標値に届かず、評価がCであったことに起因すると思われるが、両展の内容の充実度からすれば、Aでもよいのでは。
	B	
(3) 教育・普及活動		
B	委員評価	【委員コメント】各展それぞれボランティア制度の充実を教育普及活動の根幹に置いているようで、それはそれで高く評価するが、各館学芸員自身がもっともっと教育普及の現場に立ち、来館者と直接向き合うべきではないか。
	C	
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
B	委員評価	【委員コメント】調査研究は収集、寄託、展覧会事業など博物館活動すべてにわたって質の向上を担保するための基礎となるべきもので、さらなる充実を図りたい。当然そのための経費の増額が必要だろう。
	A	
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
A	委員評価	【委員コメント】地方への出前展の充実を望む。
	A	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】部会でも発言したが、正倉院展での仮設トイレの件、そろそろ仮設でその場をしのぐみっともない光景はやめたらどうか。根本的な対策を模索すべきだろう。ことは仮設トイレの問題に限らない。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|---|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p><u>B：所期の目標を達成している※</u></p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|---|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（研究所・センター一部会）

まとめ

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
岡田 部会長	委員 評価 A	<p>・無形遺産の調査と保存事業が進む中で、その危機的状況が説かれているが、こうした遺産の多くが、有形遺産の文化的価値と密接に関連しているという認識の下、まず落ちのない調査とそのための予算化が急務ではないか。</p> <p>・基礎的な個別研究では奈文研を中心としたこれまでの官衙研究の実績を高く評価したい。</p> <p>・中国韓国など海外との人的交流や共同研究は、国際協働としても評価できる事業であり、今の政治的環境の中で大事に育てほしい。</p>
寺崎 副部会長	A	<p>小項目評価「A」は妥当と考える。なお、その細目③に関して、継続的な調査のため、個別事業の評価としては「A」より「B」の方が多くなったが、定性的成果も加味して、③全体として「A」と自己評価した旨のコメントがあった。その点は同意できるが、それならば個別事業ごとの評価も、その観点から、いくつかは「A」を付けて良いのではなからうか。</p>
児島委員	A	<p>全体にきわめて充実した成果をあげている。情報公開の促進、海外組織との連携は社会への貢献度が大きく、高く評価できる。</p> <p>(4)に関わるかもしれないが、例えば黒田記念館の鑑賞の手引きについてもpdfをweb上で提供することで利用者の利便性を高めつつ広報に役立てることも可能ではないだろうか。黒田清輝宛書簡の翻刻は独立した事業計画でもよいほど重要であり長い時間がかかると思われる。今後とも一層の黒田記念室の資料の研究と公開への取り組みが続けられることを期待したい。奈良文化財研究所の中国、韓国との共同研究も地道な取り組みとして意義深い。</p>
斎藤委員	A	<p>歴史的・文化的に価値の高い資料や文化遺産の調査研究などを積極的に進めている。できれば得られた結果を、研究者だけではなく、一般の人びとや後世に向けて広く積極的に伝える方法も考えてもらえるとありがたい。</p>
寺田委員	A	<p>各機関とも多様なプロジェクトを実施し、十分な成果をあげている。特に、東文研が実施した「無形文化遺産の保存・継承に関する調査研究および、無形文化財に関わる音声画像映像資料のデジタル化」プロジェクトは、緊急の課題に取り組んでおり、その成果も高く評価できるが、伝統楽器の製作などに関わる技術の伝承が危機に瀕している楽器、音楽ジャンルは他にも数多いので、同様の調査記録プロジェクトを継続して実施して欲しい。</p>
柳林委員	S	<p>国からの国立文化財機構への運営費交付金が削減される中、東京、奈良両文化財研究所とアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）は、国が求める自主財源を獲得する方法が博物館に比較して極めて限られている。そのような苦境にあっても、さまざまな知恵と工夫、そして職員の崇高な使命感で中心的業務である「調査研究」に精力的に取り組む、レベルの高い研究成果を生み出して世界に発信していることが自己点検評価報告書でわかり、賞賛に値して喜ばしい。</p> <p>奈良文化財研究所は平城宮跡や藤原宮跡を毎年、発掘調査し、古代宮都の成立や実態の解明に大きく貢献している。平成30年度は奈良時代に皇太子が住んだ平城宮東院地区で調理用の炉跡とみられる遺構を初めて発見し、厨房施設の解明につながる成果となった。半世紀余りに国道24号バイパスの建設に伴って平城宮東部に突き出た一角が見つかり、それが東院と判明した。以来、調査を続け、庭園などが見つかって復元されているが、中枢部は民家があるなどして未解明である。</p> <p>その膨大な調査や研究成果は奈良時代史を考える貴重な資料であり、日本の成り立ちを知る極めて重要な研究対象で誇るべき財産だ。今回の大きな発見を契機にこれまでの調査を総括し、今後への展望を明らかにする展覧会やシンポジウムを開催したらどうだろうか。地道な継続調査の重要性がアピールできるだろう。そして財政的な厳しさから通年調査が難しくなっている現状への理解にもつなげることができる。国民の理解と協力が、継続的な調査研究を支えてくれるのであり、そのためには力強い情報発信が求められている。</p> <p>また、庭園研究家、森蘊氏の貴重な寄贈資料がきっちりと目録化され、HPで</p>

		<p>公開されたことは、研究の進展に寄与する成果で高く評価したい。奈文研で研究した森さんの研究は貴重であり、目録化を実現した努力に敬意を表す。海外でも日本庭園の素晴らしさが評価されており、資料がしっかり伝えられることに感謝する。</p> <p>東京文化財研究所は高齢化や過疎化などで継承の危機に瀕している無形民俗文化財の記録化や調査研究に力を注いでおり、時間のかかる地道な取り組みに頭が下がる。その重要性は、とくに東日本大震災の時に指摘され、津波で大きな被害に遭った無形民俗文化財の保存、復興の試みが行われたことは記憶に新しい。限られた地域で、限られた時期に行われる無形民俗文化財も多く、記録化はかなりの労力と準備が必要だ。一度廃れると復活は難しいのが無形民俗文化財であり、それらの困難を乗り越えての、日本人の心のよりどころでもある文化財の記録は必須の事業だ。国や地方自治体との連携をさらに深め、困難は伴うが、人的な充実にも努めてその記録を将来へ確実に伝える方策に全力を尽くしてほしい。著作権や肖像権などの問題を解決しながら広く国民に映像での記録も提供し、各地に残る優れた文化遺産を一つでも多く残していただきたい。東文研に期待したい。</p> <p>いずれにしても、3機関の精力的な調査研究は「S」評価が妥当と考える。</p>
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
岡田 部会長	委員 評価 A	<ul style="list-style-type: none"> ・水中遺産の調査研究情報について、さらに国際的に視野を広げるとともに、未加盟の条約に日本としてどうかかわるべきか検討できる材料の提供まで検討してほしい。 ・生物劣化対策の分野で創造的研究、また多種文化財の保存処理での蛍光 X 線の活用など先端的分野に顕著な成果が見られ、今後のさらなる深化に注目したい。 ・他方近代コンクリート建造物の保存ないし劣化対策の分野は未だ確たる成果が覚束ないのが現状。指定・登録物件の増加が今後見込まれるだけに、その取り組みは緊要であり、ヨーロッパとの協働・意見交換も評価したい。
寺崎 副部会長	A	小項目評価「A」は妥当と考える。
児島委員	A	個別の評価で B が多いが全体としては A 判定とするという自己評価を尊重した。地道な研究であるために自己評価を B 判定としている案件について個別にみると、効率性においては人的、予算的な限界から B 判定になっていると思われるものもあり、効率性は評価の指標としてなじまない場合があるように思われる。
斎藤委員	A	新しい研究手法を常に取り入れ、また試行にとどめず、きちんと実用化している点を高く評価したい。
寺田委員	A	—
柳林委員	A	<p>年輪年代や動植物遺体、古墳壁画などの研究は、最新の科学機器を駆使した先進的な取り組み。文科系学問の考古学はかつてこの種の理化学的なアプローチが遅れていたが、現在では文化財の構造や材質、状態、技法等を究明して最終的には文化財保存に結び付けることができる役割が飛躍的に高まっている。機器は高額であることから機関が協力して相互利用することも大切だろう。</p> <p>両研究所は積極的に科学技術を活用し、とくに高松塚古墳やキトラ古墳の極彩色壁画の研究や保存での取り組みの成果は顕著である。高松塚古墳は当初、石室解体で極彩色壁画を運び出し、保存修理を始めて10年間で終わるとされていたが、まだ数年かかるそうで、継続的な取り組みに期待し、修理後は壁画の公開を実現して、文化財保存における科学技術の貢献を紹介すべきだろう。他の装飾古墳壁画の保存にも応用できる研究方法や保存技術が高松塚やキトラでの取り組みから得られることは十分考えられ、いっそうの普遍的な取り組みが求められる。われわれは壁画劣化が明らかになった時のことを忘れてはならないし、長い期間と莫大な国費を使つての壁画保存事業を将来に生かしていく方策も考えなければならない。</p> <p>LED照明は熱を発生せず、消費電力も少なく、長持ちすることなどから文化財展示でも有効とされ、博物館や寺院でよく使われるようになった。しかし、東文研の調査によると、鍾乳洞ではLED照明の使用で緑色生物が目立っているとの報告があり、衝撃的である。LED照明が万能ではないようで、地方自治体や博物館などへのLED照明に関する適切な指導や助言をしていただきたい。</p>

(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 A 委員評価 A		
岡田 部会長	委員 評価 B	<ul style="list-style-type: none"> ・継続してユネスコの委員会審議など世界遺産情報を収集する事業は国際協働というより情報の収集と成果の公開に意味がある。以前にも指摘したが、限定的な集会を超えた形での公開について、同様な事業を進める文化庁との棲み分けと合わせて一考願いたい。 ・アンコール遺跡での日本派遣チームの活躍は国レベルの援助として評価される一方、奈文研は西トップ、東文研はタネイというそれぞれ別個の現場を持つ必要があるのか、説明が欲しい。機構全体の事業費削減傾向が続く中、一本化するか他の地域に振り向けるかも考慮されてよいのではないか。 ・ミャンマーの遺跡保存への協力は、時宜を得た事業で所期の効果を上げていると評価したい。 ・在外美術品修復事業、国内外での研修事業とも少ないスタッフの健闘が目玉を引くものの評価はBにとどまっている。継続することに意義を見出したい。 ・個々の研究員の努力は求められる以上の実績を残しているにちがいないが、総じて評価をAとするには躊躇する。
寺崎 副部会長	A	<p>小項目評価「A」は妥当と考える。</p> <p>研修・研究会・研究者派遣などについて、回数の記述があるが、可能ならば前年度比を示してもらえると、わかりやすい(勿論、回数が多寡だけで評価を云々するわけではない)。</p>
児島委員	B	<p>東文研、奈文研とも①について総合Bと自己評価しており、IRCIの②がA評価でとなっているがIRCIはそもそも国際協働をおこなう機関であるため、この項目の評価はBでよいのではないか。IRCIの活動において事業予算の安定的確保が難しい状況については改善されることが望ましい。</p>
斎藤委員	A	<p>日本の保存技術を適用するだけでなく、各遺産の学術的調査を着実に実施して成果を挙げている点を高く評価したい。</p>
寺田委員	A	<p>両研究所およびセンターともに多角的に国際協働に取り組み、技術支援、人材養成などで実質的な成果をあげるとともに、国際的ネットワークの強化にも積極的に取り組んでいる点が高く評価できる。</p>
柳林委員	A	<p>日本を代表する両研究所とセンターは、国際的にも先進的な研究成果や保存技術などを持っており、諸外国にそれらを提供し、協力してグローバルな文化財の調査研究、保存に役立っていることは高く評価される。</p> <p>奈文研はカンボジア・西トップ遺跡での困難な遺跡修復で成果を上げている。壊れた寺院遺構を再構築する作業は繊細な日本人ならでのことで、現地の若手研究者にも大いに勉強になっている。人材育成にも力を入れており、文化財保存技術の自立にもつながって貢献度は大きい。「カンボジア王国友好勲章」(サハメトレイ勲章)の授与は特筆すべきだ。奈文研は「文化平和大使」の役割もこなして国際理解も促進しており、この項目の年度計画評価は「B」ではなく「A」でいい。</p> <p>一方、東文研の在外日本古美術保存修復協力事業や外国で関心が高まる「紙の保存と修復」の国際研修なども時機を得た取り組みで、日本美術の素晴らしさを知ってもらい、修復方法も身に着けられる機会は国際協働に大きく資している。</p> <p>IRCIは2011年設立と歴史は浅く、少ない職員と予算で厳しい状況だが、機構の努力や東文研などの協力で活動が軌道に乗ってきた。範囲の広いアジア太平洋地域の無形文化遺産の調査研究や保護に邁進しており、高く評価されている。無形文化遺産は各地で危機に直面しており、センターの役割は重い。国や機構は、専従職員の採用増などでセンターの充実した態勢作りに力をいれ、センターも東文研などといっそう連携を密にし、さらなる成果を出してほしい。</p>
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
岡田 部会長	委員 評価 A	<ul style="list-style-type: none"> ・奈文研新庁舎の使用開始に合わせて蔵書や収蔵設備が一段と充実したことは喜ばしいが、一般来訪者の利用が捗々しくないという。利用空間の改善、案内の徹底など検討の余地がありそうだ。 ・平城宮では現在「南門」の復原事業を進めているが、宮域全体の将来像を含め、事業計画に関する議論をできるだけ公にするとともに、工事現場で実施される伝統工法、大工技術など可能な範囲で公開できないか、検討を望みたい。

		・飛鳥・藤原の遺跡が世界遺産登録を目指している折、その保存管理にあたって藤原宮跡資料室のガイダンス機能を見直す準備を考えるべきではないだろうか。
寺崎 副部長	A	小項目評価「A」は妥当と考える。定期刊行物・データベース・講演会など、これまでと同様に着実に成果をあげていると考える。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
児島委員	A	データベースの利用が激増するなど具体的に大きな成果をあげていると認められる。[2411E] [2411F] [2423E] [2431F] は専門性と一般公開との両立がなされていると認められた。
斎藤委員	A	文化庁には、全国標準となる文化財用語や歴史用語の英語訳の整備をお願いしたい。現在は、各機関が独自に訳をあてており、また同一機関でも出版物とウェブで訳が異なるなど、混乱した状況にある。
寺田委員	A	—
柳林委員	A	<p>上記(4)の中期計画の項目は、ナショナルセンターの3機関にとって国民や世界の人々と研究の果実を共有できるために極めて重要な取り組みである。東文研のアーカイブの充実や奈文研の文化財情報DBの整備・充実はそれに該当し、目覚ましい発展を遂げていて国民の期待に応えている。</p> <p>とくに奈文研のDBへのアクセスが930万件、全国遺跡報告総覧が830万件、ウェブサイトでは前年度比26%増の1367万件となっていて驚異的だ。多くの人々の利用がわかるが、利用者の立場に立っていっそうのプログラムやシステムの充実と利便性の向上を図り、セキュリティ強化にも努めていただきたい。</p> <p>奈文研の新庁舎ができたのは喜ばしい。職務遂行の環境が整ったことは勤労意欲のいっそうの向上につながる。後々の研究成果が楽しみである。とくに書庫の充実が研究環境が良好になり、好ましい。蔵書スペースは旧庁舎の3倍に増えた。</p> <p>しかし、一般利用者の閲覧スペースが狭いように感じた。閲覧室前の通路部分にスペースを設けたが、暗くて狭苦しい気がした。利用者は年間219日の開室でわずか295人。1日1.3人と少ない。旧庁舎での利用者より少ないのではないだろうか。DBの充実で利用者の疑問や要求に対応できて研究所を訪れるケースが減ったとの見方もできるが、もう少し開放的で利用しやすいスペースにできないものだろうか。利用者の増加は、奈文研への理解促進にもつながる。</p>
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
自己点検評価 B 委員評価 B		
岡田 部長	委員 評価 B	<p>・継続している文化財担当者研修事業はしっかり定着しており、とくに奈文研の役割は大きい。今後は文化財保護法改正に伴って課題とされる地域計画策定を担う人材研修プログラムにも期待したい。</p> <p>・文化財防災ネットワーク事業が、自治体の貴重な経験をシェアする貴重な絆となっているばかりでなく、対外援助にも大いに資する可能性を考慮すれば、間もなく事業が閉じられるとの既定路線は、機構の恒常的部門として見直すこともあってよいのではないかと思料する。</p>
寺崎 副部長	B	小項目評価「B」は妥当と考える。三機関ともに限られた人員・予算の中で、いくつもの業務を並行して行っているであろうと推測され、その点には敬意を表したい。
児島委員	B	よく活動されていることがわかった。
斎藤委員	B	—
寺田委員	B	報告書の記載が不十分なものが散見される。たとえば、奈文研のプロジェクト2541Fではプロジェクトの名称にあげられていない大学からの参加者が一番多いのはなぜか。同2522Fでは、プロジェクト名称にあげられている共同研究の報告がない。東文研のプロジェクト2522Eでは、共同研究の内容を記載して欲しい。当初の計画が変更されることは問題ではないが、簡単な説明が欲しい。
柳林委員	A	両研究所はナショナルセンターとして全国の自治体を指導、助言、監督する役割があり、その重要性は年々高まっている。自治体の文化財担当者に対するきめ細かな研修を多彩な内容で実施し、職員の相談にも乗っており、レベルの向上に資して心強い存在だ。受講者のニーズにも応えたカリキュラムは実践に役立つ内容で、受講者が全国に帰って地域の文化財行政に生かしていることが喜ばし

	<p>い。</p> <p>東文研が実施した虫菌害やカビ発生という生物被害対策の研修は充実した内容だった。助言や協力も少ない人数でこなし、専門家の指導で文化財保存の質的向上につながった。また、文化財保護法の改正や東京五輪を控えて文化財活用の機運が高まる中での「相談窓口」の開設は時機を得た取り組みといえる。</p> <p>奈文研では国交省が進める平城宮跡の復元整備事業に適切なアドバイスを行ったほか、昨年開館した国交省の「平城宮いざない館」での展示や運営に協力し、キトラ古墳壁画館での管理運営にも携わるなど国交省との連携を密にして見学者の理解を深めることに貢献した。ただ、「いざない館」が優れた施設なのに見学者の足が伸びていないのが残念。国交省と協議し、最寄り駅からのアクセス向上や平城宮跡資料館、平城宮大極殿などを回遊する交通手段の導入などを考えてほしい。東日本大震災後に発足した「文化財防災ネットワーク」の活躍も目覚ましい。全国自治体を指導、牽引するこれらの活動は「A」評価を与えて当然だ。</p>
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
岡田 部会長	<ul style="list-style-type: none"> ・この度の評価プロセス及び書式の変更について、事前に事務局からの十分な説明や委員の意見調書機会は設けられず、継続委員の間では疑義の声も聞かれる。とくに博物館事業、財務関係について委員の発言機会が損なわれた点は否めない。その理由が何に由来するのか、全委員に対して開示してもらえないものか。 ・評価書の趣旨から外れるかもしれないが、奈文研新庁舎を含む平城宮全体への見学者誘導について、最寄りの大和西大寺駅周辺に地図や案内標識は皆無に近く、当地ほど不親切な世界遺産所在地は他に知らない。自治体、鉄道会社との連携により懇切な手配を望みたい。
寺崎 副部会長	<p>この委員会（研究所・センター部会）の開催時期について。たとえば、奈文研の「紀要」の刊行は6月であり、そこに前年度の成果が示されるが、4月の委員会時は未刊のため、紀要に基づいて報告を聞くことができないのが残念である。ほかのスケジュールとの関係もあろうが、委員会の日程について少し検討してもらいたい。</p>
児島委員	<p>今回評価方法が改定され、小項目ごとに評価をおこなうことになったが、含まれる内容が多岐にわたるため、かえって書きにくく感じた。また総会で部会ごとの委員が意見を述べる場が無くなったためこちらに記すが、今後、東京国立博物館と東京文化財研究所が特に近代美術の展示や保存についてなどに関して連携をおこなっていくことは検討されないのだろうか。</p> <p>個別の事例であるが、東京国立博物館所蔵の山崎朝雲《ジェンナー像》(1897)は明治の彫刻として優れた作例であり、また早期の屋外彫刻として台座とともにきわめて重要である。いくらか修理はされていると思われるが既に劣化が進んでいる。現在樹木の下に位置するが、屋外彫刻は樹木の下にあると葉についた有害物質が濃い濃度になって雨水とともに像に落ちて腐食を促進するため樹木の下を避けるように、とは以前東京文化財研究所で学んだことである。鑑賞上も適した環境とは言いがたく、早急に像を屋内に移す必要があると考えている。</p>
斎藤委員	<p>自己点検評価のやり方について。個別の事業は、準備期間などで表向きはあまり進展がみられない年と、それが実って大きく進行する年があるため、単年度では評価ができず、また無理に評価しようとするとう展の著しくないとばかりに目が向いてしまう。今年度のように、大きなくくりで、複数事業の関連性や連携も見据えながら、全体的な事業の進み具合を評価した方が、より正しい評価が可能になると思う。</p>
寺田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の柳沢委員の提言を受けて、評価の体制に変更が加えられたが、博物館部会と研究所・センター部会の担当委員が直接に意見交換する機会がなくなったことは残念である。博物館と研究所の協働について評価するには両者の活動報告を知る必要があるためである。また、全体集会の日程調整が終了したあとで、このような変更が通知されたため、改善に向けて十分な検討が行われたのか疑問が残った。 ・アジア太平洋無形文化遺産研究センターへの予算状況（受託研究へのほぼ完全な依存）が長期的な事業の計画・実施を難しくしている点を昨年度指摘したが、状況は改善していない。機構全体の予算状況が厳しいにせよ、機構におけるセンターや研究所の存在理由にも関わる本質的な問題であると思われるため、改善のための創造的な解決法の検討をお願いしたい。 ・細かい点ではあるが、報告書にはプロジェクト名称に改善の余地があるもの、プロジェクト名称と実施内容の関連に不明な点が残るものが散見された。例えば、「韓国との共同研究」「中国との共同研究」などは、研究の内容がわかるプロジェクト名称が必要である。
柳林委員	<ul style="list-style-type: none"> ・運営費交付金の削減は深刻だ。奈文研では独立行政法人になった2001年度に比べ、3分の2に減ったという。このため、中心事業の平城宮跡や藤原宮跡での通年調査が困難

になりつつあるといい、驚きを禁じ得ない。東京五輪やパラリンピックを控えて日本の歴史や文化に世界から関心が集まり、国も文化発信や「文化財の活用」に力を入れているのはよいことだ。しかし、現実としては毎年、機構の状況が厳しくなっており、改善は一刻の猶予もできない。わが国は先進国の中で文化関係予算が低い。フランスの10分の1との指摘もある。国や安倍首相は「文化に力を入れる」と言っており、まず財政面で実行してほしい。100兆円を超える国全体の予算から見れば、1000億円を少し超える現在の文化関係予算はあまりにも貧弱だ。運営交付金の増額を国に強く求めたい。「有言実行」で善処を期待する。

・評価体制の変更が急遽、行われた。昨年の総会で、総会資料に研究所・センター部会の記述が博物館部会に比べて極めてわずかなことなどを私が指摘したのがきっかけと思うが、指摘の趣旨や意図した改善の方向性とは異なった変更であり、総会で博物館や機構の情報を得て評価ができなくなったのは残念だ。

今さらここで縷々述べないが、▽総会に出席して博物館活動や機構本部の状況などを知り、評価したい▽総会は両部会の委員が博物館関係者や研究所・センターの関係者と情報交換する年1回の貴重な機会——と申し上げたい。部会の壁を越えて機構の現状や課題を大局的に把握するのは外部評価委員の務めで、それを知ってこそ機構へのより手厚い国の支援を要望できる。総会に参加できないのは寂しい。

機構本部から2月26日、「研究所・センター部会は4月22日に奈良で、博物館部会との総会は5月30日に東京で開催するので出席をお願いしたい」との主旨のメールが届いた。ところが3月29日着の封書で「部会委員は担当部会だけの出席」と変更が知らされた。機構は「昨年の指摘を受けて1年間、検討した」と説明するが、少なくとも2月末までは私どもに総会への出席が求められていたのである。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		<p>※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。</p> <p>また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。</p>
岡田保良		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無形遺産の調査と保存事業が進む中で、その危機的状況が説かれているが、こうした遺産の多くが、有形遺産の文化的価値と密接に関連しているという認識の下、まず落ちのない調査とそのための予算化が急務ではないか。 ・基礎的な個別研究では奈文研を中心としたこれまでの官衙研究の実績を高く評価したい。 ・中国韓国など海外との人的交流や共同研究は、国際協働としても評価できる事業であり、今の政治的環境の中で大事に育んでほしい。
A	A	
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水中遺産の調査研究情報について、さらに国際的に視野を広げるとともに、未加盟の条約に日本としてどうかかわるべきか検討できる材料の提供まで検討してほしい。 ・生物劣化対策の分野で創造的研究、また多種文化財の保存処理での蛍光 X 線の活用など先端的分野に顕著な成果が見られ、今後のさらなる深化に注目したい。 ・他方近代コンクリート構造物の保存ないし劣化対策の分野は未だ確たる成果が覚束ないのが現状。指定・登録物件の増加が今後見込まれるだけに、その取り組みは緊要であり、ヨーロッパとの協働・意見交換も評価したい。
A	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続してユネスコの委員会審議など世界遺産情報を収集する事業は国際協働というより情報の収集と成果の公開に意味がある。以前にも指摘したが、限定的な集会を超えた形での公開について、同様な事業を進める文化庁との棲み分けと合わせて一考願いたい。 ・アンコール遺跡での日本派遣チームの活躍は国レベルの援助として評価される一方、奈文研は西トップ、東文研はタネイというそれぞれ別個の現場を持つ必要があるのか、説明が欲しい。機構全体の事業費削減傾向が続く中、一本化するか他の地域に振り向けるかも考慮されてよいのではないか。 ・ミャンマーの遺跡保存への協力は、時宜を得た事業で所期の効果を上げていると評価したい。 ・在外美術品修復事業、国内外での研修事業とも少ないスタッフの健闘が目を引きくもの評価はBにとどまっている。継続することに意義を見出したい。 ・個々の研究員の努力は求められる以上の実績を残しているにちがいないが、総
A	B	

		じて評価をA とするには躊躇する。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 ・奈文研新庁舎の使用開始に合わせて蔵書や収蔵設備が一段と充実したことは喜ばしいが、一般来訪者の利用が捗々しくないという。利用空間の改善、案内の徹底など検討の余地がありそうだ。 ・平城宮では現在「南門」の復原事業を進めているが、宮域全体の将来像を含め、事業計画に関する議論をできるだけ公にするとともに、工事現場で実施される伝統工法、大工技術など可能な範囲で公開できないか、検討を望みたい。 ・飛鳥・藤原の遺跡が世界遺産登録を目指している折、その保存管理にあたって藤原宮跡資料室のガイダンス機能を見直す準備を考えるべきではないだろうか。
	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	【委員コメント】 ・継続している文化財担当者研修事業はしっかり定着しており、とくに奈文研の役割は大きい。今後は文化財保護法改正に伴って課題とされる地域計画策定を担う人材研修プログラムにも期待したい。 ・文化財防災ネットワーク事業が、自治体の貴重な経験をシェアする貴重な絆となっているばかりでなく、対外援助にも大いに資する可能性を考慮すれば、間もなく事業が閉じられるとの既定路線は、機構の恒常的部門として見直すこともあってよいのではないかと思料する。
	B	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 ・この度の評価プロセス及び書式の変更について、事前に事務局からの十分な説明や委員の意見調書機会は設けられず、継続委員の間では疑義の声も聞かれる。とくに物館事業、財務関係について委員の発言機会が損なわれた点は否めない。その理由が何に由来するのか、全委員に対して開示してもらえないものか。 ・評価書の趣旨から外れるかもしれないが、奈文研新庁舎を含む平城宮全体への見学者誘導について、最寄りの大和西大寺駅周辺に地図や案内標識は皆無に近く、当地ほど不親切な世界遺産所在地は他に知らない。自治体、鉄道会社との連携により懇切な手配を望みたい。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
寺崎保広		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】 小項目評価「A」は妥当と考える。なお、その細目③に関して、継続的な調査のため、個別事業の評価としては「A」より「B」の方が多くなったが、定性的成果も加味して、③全体として「A」と自己評価した旨のコメントがあった。その点は同意できるが、それならば個別事業ごとの評価も、その観点から、いくつかは「A」を付けて良いのではなかろうか。
A		
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】 小項目評価「A」は妥当と考える。
A		
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】 小項目評価「A」は妥当と考える。研修・研究会・研究者派遣などについて、回数の記述があるが、可能ならば前年度比を示してもらえると、わかりやすい（勿論、回数が多寡だけで評価を云々するわけではないが）。
A		
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】 小項目評価「A」は妥当と考える。定期刊行物・データベース・講演会など、これまでと同様に着実に成果をあげていると考える。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
A		
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】 小項目評価「B」は妥当と考える。三機関ともに限られた人員・予算の中で、いくつもの業務を並行して行っているであろうと推測され、その点には敬意を表したい。
B		
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 この委員会（研究所・センター部会）の開催時期について。たとえば、奈文研の「紀要」の刊行は6月であり、そこに前年度の成果が示されるが、4月の委員会時は未刊のため、紀要に基づいて報告を聞くことができないのが残念である。ほかのスケジュールとの関係もあろうが、委員会の日程について少し検討してもらいたい。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|---|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p><u>B：所期の目標を達成している※</u></p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|---|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		<p>※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。</p> <p>また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。</p>
児島 薫		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	<p>【委員コメント】全体にきわめて充実した成果をあげている。情報公開の促進、海外組織との連携は社会への貢献度が大きく、高く評価できる。（4）に関わるかもしれないが、例えば黒田記念館の鑑賞の手引きについても pdf を web 上で提供することで利用者の利便性を高めつつ広報に役立てることも可能ではないだろうか。黒田清輝宛書簡の翻刻は独立した事業計画でもよいほど重要であり長い時間がかかると思われる。今後とも一層の黒田記念室の資料の研究と公開への取り組みが続けられることを期待したい。奈良文化財研究所の中国、韓国との共同研究も地道な取り組みとして意義深い。</p>
A	A	
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>個別の評価でBが多いが全体としてはA判定とするという自己評価を尊重した。地道な研究であるために自己評価をB判定としている案件について個別にみると、効率性においては人的、予算的な限界からB判定になっていると思われるものもあり、効率性は評価の指標としてなじまない場合があるように思われる。</p>
A	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>東文研、奈文研とも①について総合Bと自己評価しており、IRCIの②がA評価でとなっているがIRCIはそもそも国際協働をおこなう機関であるため、この項目の評価はBでよいのではないかと。IRCIの活動において事業予算の安定的確保が難しい状況については改善されることが望ましい。</p>
A	B	
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>データベースの利用が激増するなど具体的に大きな成果をあげていると認められる。[2411E] [2411F] [2423E] [2431F] は専門性と一般公開との両立がなされていると認められた。</p>
A	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>よく活動されていることがわかった。</p>
B	B	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		

【委員コメント】

今回評価方法が改定され、小項目ごとに評価をおこなうことになったが、含まれる内容が多岐にわたるため、かえって書きにくく感じた。また総会で部会ごとの委員が意見を述べる場が無くなったためこちらに記すが、今後、東京国立博物館と東京文化財研究所が特に近代美術の展示や保存についてなどに関して連携をおこなっていくことは検討されないのだろうか。個別の事例であるが、東京国立博物館所蔵の山崎朝雲《ジェンナー像》(1897)は明治の彫刻として優れた作例であり、また早期の屋外彫刻として台座とともにきわめて重要である。いくらか修理はされていると思われるが既に劣化が進んでいる。現在樹木の下に位置するが、屋外彫刻は樹木の下にあると葉についた有害物質が濃い濃度になって雨水とともに像に落ちて腐食を促進するため樹木の下を避けるように、とは以前東京文化財研究所で学んだことである。鑑賞上も適した環境とは言いがたく、早急に像を屋内に移す必要があると考えている。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
齋藤 努		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】 歴史的・文化的に価値の高い資料や文化遺産の調査研究などを積極的に進めている。できれば得られた結果を、研究者だけではなく、一般の人びとや後世に向けて広く積極的に伝える方法も考えてもらえるとありがたい。
A	A	
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】 新しい研究手法を常に取り入れ、また試行にとどめず、きちんと実用化している点を高く評価したい。
A	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】 日本の保存技術を適用するだけでなく、各遺産の学術的調査を着実に実施して成果を挙げている点を高く評価したい。
A	A	
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】 文化庁には、全国標準となる文化財用語や歴史用語の英語訳の整備をお願いしたい。現在は、各機関が独自に訳をあてており、また同一機関でも出版物とウェブで訳が異なるなど、混乱した状況にある。
A	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】
B	B	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 自己点検評価のやり方について。個別の事業は、準備期間などで表向きはあまり進展がみられない年と、それが実って大きく進行する年があるため、単年度では評価ができず、また無理に評価しようとするとう進展の著しくないとばかりに目が向いてしまう。今年度のように、大きなくくりで、複数事業の関連性や連携も見据えながら、全体的な事業の進み具合を評価した方が、より正しい評価が可能になると思う。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|---|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p><u>B：所期の目標を達成している※</u></p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|---|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
寺田吉孝		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】
A	A	各機関とも多様なプロジェクトを実施し、十分な成果をあげている。特に、東文研が実施した「無形文化遺産の保存・継承に関する調査研究および、無形文化財に関わる音声画像映像資料のデジタル化」プロジェクトは、緊急の課題に取り組んでおり、その成果も高く評価できるが、伝統楽器の製作などに関わる技術の伝承が危機に瀕している楽器、音楽ジャンルは他にも数多いので、同様の調査記録プロジェクトを継続して実施して欲しい。
(2) 科学技術を活用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	両研究所およびセンターともに多角的に国際協働に取り組み、技術支援、人材養成などで実質的な成果をあげるとともに、国際的ネットワークの強化にも積極的に取り組んでいる点が高く評価できる。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】
B	B	報告書の記載が不十分なものが散見される。たとえば、奈文研のプロジェクト2541Fではプロジェクトの名称にあげられていない大学からの参加者が一番多いのはなぜか。同2522Fでは、プロジェクト名称にあげられている共同研究の報告がない。東文研のプロジェクト2522Eでは、共同研究の内容を記載して欲しい。当初の計画が変更されることは問題ではないが、簡単な説明が欲しい。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		

【委員コメント】

- 昨年度の柳沢委員の提言を受けて、評価の体制に変更が加えられたが、博物館部会と研究所・センター一部会の担当委員が直接に意見交換する機会がなくなったことは残念である。博物館と研究所の協働について評価するには両者の活動報告を知る必要があるためである。また、全体集会の日程調整が終了したあとで、このような変更が通知されたため、改善に向けて十分な検討が行われたのか疑問が残った。
- アジア太平洋無形文化遺産研究センターへの予算状況（受託研究へのほぼ完全な依存）が長期的な事業の計画・実施を難しくしている点を昨年度指摘したが、状況は改善していない。機構全体の予算状況が厳しいにせよ、機構におけるセンターや研究所の存在理由にも関わる本質的な問題であると思われるため、改善のための創造的な解決法の検討をお願いしたい。
- 細かい点ではあるが、報告書にはプロジェクト名称に改善の余地があるもの、プロジェクト名称と実施内容の関連に不明な点が残るものが散見された。例えば、「韓国との共同研究」「中国との共同研究」などは、研究の内容がわかるプロジェクト名称が必要である。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
 - A：所期の目標を上回る成果が得られている
 - B：所期の目標を達成している※**
 - C：所期の目標を下回っており、改善を要する
 - D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
- ※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名 柳林 修	※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置			
<p style="text-align: center;">〔研究所・センター業務〕</p>			
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施			
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究			
自己点検評価 A	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center;">委員評価</td> <td> 【委員コメント】 国からの国立文化財機構への運営費交付金が削減される中、東京、奈良両文化財研究所とアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）は、国が求める自主財源を獲得する方法が博物館に比較して極めて限られている。そのような苦境にあっても、さまざまな知恵と工夫、そして職員の崇高な使命感で中心的業務である「調査研究」に精力的に取り組み、レベルの高い研究成果を生み出して世界に発信していることが自己点検評価報告書でわかり、賞賛に値して喜ばしい。 奈良文化財研究所は平城宮跡や藤原宮跡を毎年、発掘調査し、古代宮都の成立や実態の解明に大きく貢献している。平成30年度は奈良時代に皇太子が住んだ平城宮東院地区で調理用の炉跡とみられる遺構を初めて発見し、厨房施設の解明につながる成果となった。半世紀余りに国道24号バイパスの建設に伴って平城宮東部に突き出た一角が見つかり、それが東院と判明した。以来、調査を続け、庭園などが見つかって復元されているが、中枢部は民家があるなどして未解明である。 その膨大な調査や研究成果は奈良時代史を考える貴重な資料であり、日本の成り立ちを知る極めて重要な研究対象で誇るべき財産だ。今回の大きな発見を契機にこれまでの調査を総括し、今後への展望を明らかにする展覧会やシンポジウムを開催したらどうだろうか。地道な継続調査の重要性がアピールできるだろう。そして財政的な厳しさから通年調査が難しくなっている現状への理解にもつなげることができる。国民の理解と協力が、継続的な調査研究を支えてくれるのであり、そのためには力強い情報発信が求められている。 また、庭園研究家、森蘊氏の貴重な寄贈資料がきっちりと目録化され、HPで公開されたことは、研究の進展に寄与する成果で高く評価したい。奈文研で研究した森さんの研究は貴重であり、目録化を実現した努力に敬意を表す。海外でも日本庭園の素晴らしさが評価されており、資料がしっかり伝えられることに感謝する。 東京文化財研究所は高齢化や過疎化などで継承の危機に瀕している無形民俗文化財の記録化や調査研究に力を注いでおり、時間のかかる地道な取り組みに頭が下がる。その重要性は、とくに東日本大震災の時に指摘され、津波で大きな被害に遭った無形民俗文化財の保存、復興の試みが行われたことは記憶に新しい。限られた地域で、限られた時期に行われる無形民俗文化財も多く、記録化はかなりの労力と準備が必要だ。一度廃れると復活は難しいのが無形民俗文化財であり、それらの困難を乗り越えての、日本人の心よりどころでもある文化財の記録は必須の事業だ。国や地方自治体との連携をさらに深め、困難は伴うが、人的な充実にも努めてその記録を将来へ確実に伝える方策に全力を尽くしてほしい。著作権や肖像権などの問題を解決しながら広く国民に映像での記録も提供し、各地に残る優れた文化遺産を一つでも多く残していただきたい。東文研に期待したい。 いずれにしても、3機関の精力的な調査研究は「S」評価が妥当と考える。 </td> </tr> </table>	委員評価	【委員コメント】 国からの国立文化財機構への運営費交付金が削減される中、東京、奈良両文化財研究所とアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）は、国が求める自主財源を獲得する方法が博物館に比較して極めて限られている。そのような苦境にあっても、さまざまな知恵と工夫、そして職員の崇高な使命感で中心的業務である「調査研究」に精力的に取り組み、レベルの高い研究成果を生み出して世界に発信していることが自己点検評価報告書でわかり、賞賛に値して喜ばしい。 奈良文化財研究所は平城宮跡や藤原宮跡を毎年、発掘調査し、古代宮都の成立や実態の解明に大きく貢献している。平成30年度は奈良時代に皇太子が住んだ平城宮東院地区で調理用の炉跡とみられる遺構を初めて発見し、厨房施設の解明につながる成果となった。半世紀余りに国道24号バイパスの建設に伴って平城宮東部に突き出た一角が見つかり、それが東院と判明した。以来、調査を続け、庭園などが見つかって復元されているが、中枢部は民家があるなどして未解明である。 その膨大な調査や研究成果は奈良時代史を考える貴重な資料であり、日本の成り立ちを知る極めて重要な研究対象で誇るべき財産だ。今回の大きな発見を契機にこれまでの調査を総括し、今後への展望を明らかにする展覧会やシンポジウムを開催したらどうだろうか。地道な継続調査の重要性がアピールできるだろう。そして財政的な厳しさから通年調査が難しくなっている現状への理解にもつなげることができる。国民の理解と協力が、継続的な調査研究を支えてくれるのであり、そのためには力強い情報発信が求められている。 また、庭園研究家、森蘊氏の貴重な寄贈資料がきっちりと目録化され、HPで公開されたことは、研究の進展に寄与する成果で高く評価したい。奈文研で研究した森さんの研究は貴重であり、目録化を実現した努力に敬意を表す。海外でも日本庭園の素晴らしさが評価されており、資料がしっかり伝えられることに感謝する。 東京文化財研究所は高齢化や過疎化などで継承の危機に瀕している無形民俗文化財の記録化や調査研究に力を注いでおり、時間のかかる地道な取り組みに頭が下がる。その重要性は、とくに東日本大震災の時に指摘され、津波で大きな被害に遭った無形民俗文化財の保存、復興の試みが行われたことは記憶に新しい。限られた地域で、限られた時期に行われる無形民俗文化財も多く、記録化はかなりの労力と準備が必要だ。一度廃れると復活は難しいのが無形民俗文化財であり、それらの困難を乗り越えての、日本人の心よりどころでもある文化財の記録は必須の事業だ。国や地方自治体との連携をさらに深め、困難は伴うが、人的な充実にも努めてその記録を将来へ確実に伝える方策に全力を尽くしてほしい。著作権や肖像権などの問題を解決しながら広く国民に映像での記録も提供し、各地に残る優れた文化遺産を一つでも多く残していただきたい。東文研に期待したい。 いずれにしても、3機関の精力的な調査研究は「S」評価が妥当と考える。
委員評価	【委員コメント】 国からの国立文化財機構への運営費交付金が削減される中、東京、奈良両文化財研究所とアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）は、国が求める自主財源を獲得する方法が博物館に比較して極めて限られている。そのような苦境にあっても、さまざまな知恵と工夫、そして職員の崇高な使命感で中心的業務である「調査研究」に精力的に取り組み、レベルの高い研究成果を生み出して世界に発信していることが自己点検評価報告書でわかり、賞賛に値して喜ばしい。 奈良文化財研究所は平城宮跡や藤原宮跡を毎年、発掘調査し、古代宮都の成立や実態の解明に大きく貢献している。平成30年度は奈良時代に皇太子が住んだ平城宮東院地区で調理用の炉跡とみられる遺構を初めて発見し、厨房施設の解明につながる成果となった。半世紀余りに国道24号バイパスの建設に伴って平城宮東部に突き出た一角が見つかり、それが東院と判明した。以来、調査を続け、庭園などが見つかって復元されているが、中枢部は民家があるなどして未解明である。 その膨大な調査や研究成果は奈良時代史を考える貴重な資料であり、日本の成り立ちを知る極めて重要な研究対象で誇るべき財産だ。今回の大きな発見を契機にこれまでの調査を総括し、今後への展望を明らかにする展覧会やシンポジウムを開催したらどうだろうか。地道な継続調査の重要性がアピールできるだろう。そして財政的な厳しさから通年調査が難しくなっている現状への理解にもつなげることができる。国民の理解と協力が、継続的な調査研究を支えてくれるのであり、そのためには力強い情報発信が求められている。 また、庭園研究家、森蘊氏の貴重な寄贈資料がきっちりと目録化され、HPで公開されたことは、研究の進展に寄与する成果で高く評価したい。奈文研で研究した森さんの研究は貴重であり、目録化を実現した努力に敬意を表す。海外でも日本庭園の素晴らしさが評価されており、資料がしっかり伝えられることに感謝する。 東京文化財研究所は高齢化や過疎化などで継承の危機に瀕している無形民俗文化財の記録化や調査研究に力を注いでおり、時間のかかる地道な取り組みに頭が下がる。その重要性は、とくに東日本大震災の時に指摘され、津波で大きな被害に遭った無形民俗文化財の保存、復興の試みが行われたことは記憶に新しい。限られた地域で、限られた時期に行われる無形民俗文化財も多く、記録化はかなりの労力と準備が必要だ。一度廃れると復活は難しいのが無形民俗文化財であり、それらの困難を乗り越えての、日本人の心よりどころでもある文化財の記録は必須の事業だ。国や地方自治体との連携をさらに深め、困難は伴うが、人的な充実にも努めてその記録を将来へ確実に伝える方策に全力を尽くしてほしい。著作権や肖像権などの問題を解決しながら広く国民に映像での記録も提供し、各地に残る優れた文化遺産を一つでも多く残していただきたい。東文研に期待したい。 いずれにしても、3機関の精力的な調査研究は「S」評価が妥当と考える。		

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>年輪年代や動植物遺体、古墳壁画などの研究は、最新の科学機器を駆使した先進的な取り組み。文科系学問の考古学はかつてこの種の理化学的なアプローチが遅れていたが、現在では文化財の構造や材質、状態、技法等を究明して最終的には文化財保存に結び付けることができる役割が飛躍的に高まっている。機器は高額であることから機関が協力して相互利用することも大切だろう。</p> <p>両研究所は積極的に科学技術を活用し、とくに高松塚古墳やキトラ古墳の極彩色壁画の研究や保存での取り組みの成果は顕著である。高松塚古墳は当初、石室解体で極彩色壁画を運び出し、保存修理を始めて10年間で終わるとされていたが、まだ数年かかるそうで、継続的な取り組みに期待し、修理後は壁画の公開を実現して、文化財保存における科学技術の貢献を紹介すべきだろう。他の装飾古墳壁画の保存にも応用できる研究方法や保存技術が高松塚やキトラでの取り組みから得られることは十分考えられ、いっそうの普遍的な取り組みが求められる。われわれは壁画劣化が明らかになった時のことを忘れてはならないし、長い期間と莫大な国費を使つての壁画保存事業を将来に生かしていく方策も考えなければならない。</p> <p>LED照明は熱を発せず、消費電力も少なく、長持ちすることなどから文化財展示でも有効とされ、博物館や寺院でよく使われるようになった。しかし、東文研の調査によると、鍾乳洞ではLED照明の使用で緑色生物が目立っているとの報告があり、衝撃的である。LED照明が万能ではないようで、地方自治体や博物館などへのLED照明に関する適切な指導や助言をしていただきたい。</p>
	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>日本を代表する両研究所とセンターは、国際的にも先進的な研究成果や保存技術などを持っており、諸外国にそれらを提供し、協力してグローバルな文化財の調査研究、保存に役立っていることは高く評価される。</p> <p>奈文研はカンボジア・西トップ遺跡での困難な遺跡修復で成果を上げている。壊れた寺院遺構を再構築する作業は繊細な日本人ならではのことで、現地の若手研究者にも大いに勉強になっている。人材育成にも力を入れており、文化財保存技術の自立にもつながって貢献度は大きい。「カンボジア王国友好勲章」（サハメトレイ勲章）の授与は特筆すべきだ。奈文研は「文化平和大使」の役割もこなして国際理解も促進しており、この項目の年度計画評価は「B」ではなく「A」でいい。</p> <p>一方、東文研の在外日本古美術保存修復協力事業や外国で関心が高まる「紙の保存と修復」の国際研修なども時機を得た取り組みで、日本美術の素晴らしさを知ってもらい、修復方法も身に着けられる機会は国際協働に大きく資している。</p> <p>IRCIは2011年設立と歴史は浅く、少ない職員と予算で厳しい状況だが、機構の努力や東文研などの協力で活動が軌道に乗ってきた。範囲の広いアジア太平洋地域の無形文化遺産の調査研究や保護に邁進しており、高く評価されている。無形文化遺産は各地で危機に直面しており、センターの役割は重い。国や機構は、専従職員の採用増などでセンターの充実した態勢作りに力をいれ、センターも東文研などといっそう連携を密にし、さらなる成果を出してほしい。</p>
	A	
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>上記(4)の中期計画の項目は、ナショナルセンターの3機関にとって国民や世界の人々と研究の果実を共有できるように極めて重要な取り組みである。東文研のアーカイブの充実や奈文研の文化財情報DBの整備・充実はそれに該当し、目覚ましい発展を遂げていて国民の期待に応えている。</p> <p>とくに奈文研のDBへのアクセスが930万件、全国遺跡報告総覧が830万件、ウェブサイトでは前年度比26%増の1367万件となっていて驚異的だ。多くの人々の利用がわかるが、利用者の立場に立っていっそうのプログラムやシステ</p>
	A	

		<p>ムの充実と利便性の向上を図り、セキュリティ強化にも努めていただきたい。</p> <p>奈文研の新庁舎ができたのは喜ばしい。職務遂行の環境が整ったことは勤労意欲のいっそうの向上につながる。後々の研究成果が楽しみである。とくに書庫の充実が研究環境が良好になり、好ましい。蔵書スペースは旧庁舎の3倍に増えた。</p> <p>しかし、一般利用者の閲覧スペースが狭いように感じた。閲覧室前の通路部分にスペースを設けたが、暗くて狭苦しい気がした。利用者は年間219日の開室でわずか295人。1日1.3人と少ない。旧庁舎での利用者より少ないのではないだろうか。DBの充実で利用者の疑問や要求に対応できて研究所を訪れるケースが減ったとの見方もできるが、もう少し開放的で利用しやすいスペースにできないものだろうか。利用者の増加は、奈文研への理解促進にもつながる。</p>
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
B	委員評価	<p>【委員コメント】</p> <p>両研究所はナショナルセンターとして全国の自治体を指導、助言、監督する役割があり、その重要性は年々高まっている。自治体の文化財担当者に対するきめ細かな研修を多彩な内容で実施し、職員の相談にも乗っており、レベルの向上に資して心強い存在だ。受講者のニーズにも応えたカリキュラムは実践に役立つ内容で、受講者が全国に帰って地域の文化財行政に生かしていることが喜ばしい</p> <p>東文研が実施した虫菌害やカビ発生という生物被害対策の研修は充実した内容だった。助言や協力も少ない人数でこなし、専門家の指導で文化財保存の質的向上につながった。また、文化財保護法の改正や東京五輪を控えて文化財活用の機運が高まる中での「相談窓口」の開設は時機を得た取り組みといえる。</p> <p>奈文研では国交省が進める平城宮跡の復元整備事業に適切なアドバイスを行ったほか、昨年開館した国交省の「平城宮いざない館」での展示や運営に協力し、キトラ古墳壁画館での管理運営にも携わるなど国交省との連携を密にして見学者の理解を深めることに貢献した。ただ、「いざない館」が優れた施設なのに見学者の足が伸びていないのが残念。国交省と協議し、最寄り駅からのアクセス向上や平城宮跡資料館、平城宮大極殿などを回遊する交通手段の導入などを考えてほしい。東日本大震災後に発足した「文化財防災ネットワーク」の活躍も目覚ましい。全国自治体を指導、牽引するこれらの活動は「A」評価を与えて当然だ。</p>
	A	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <p>・運営費交付金の削減は深刻だ。奈文研では独立行政法人になった2001年度に比べ、3分の2に減ったという。このため、中心事業の平城宮跡や藤原宮跡での通年調査が困難になりつつあるといい、驚きを禁じ得ない。東京五輪やパラリンピックを控えて日本の歴史や文化に世界から関心が集まり、国も文化発信や「文化財の活用」に力を入れているのはよいことだ。しかし、現実としては毎年、機構の状況が厳しくなっており、改善は一刻の猶予もできない。わが国は先進国の中で文化関係予算が低い。フランスの10分の1との指摘もある。国や安倍首相は「文化に力を入れる」と言っており、まず財政面で実行してほしい。100兆円を超える国全体の予算から見れば、1000億円を少し超える現在の文化関係予算はあまりにも貧弱だ。運営交付金の増額を国に強く求めたい。「有言実行」で善処を期待する。</p> <p>・評価体制の変更が急遽、行われた。昨年の総会で、総会資料に研究所・センター部会の記述が博物館部会に比べて極めてわずかなことなどを私が指摘したのがきっかけと思うが、指摘の趣旨や意図した改善の方向性とは異なった変更であり、総会で博物館や機構の情報を得て評価ができなくなったのは残念だ。</p> <p>今さらここで縷々述べないが、▽総会に出席して博物館活動や機構本部の状況などを知り、評価したい▽総会は両部会の委員が博物館関係者や研究所・センターの関係者と情報交換する年1回の貴重な機会——と申し上げたい。部会の壁を越えて機構の現状や課題を大局的に把握するのは外部評価委員の務めで、それを知ってこそ機構へのより手厚い国の支援を要望できる。総会に参加できないのは寂しい。</p> <p>機構本部から2月26日、「研究所・センター部会は4月22日に奈良で、博物館部会との総会は5月30日に東京で開催するので出席をお願いしたい」との主旨のメールが届いた。ところが3月29日着の封書で「部会委員は担当部会だけの出席」と変更が知らされた。機構は「昨年の指摘を受けて1年間、検討した」と説明するが、少なくとも2月末までは私どもにも総会への出席が求められていたのである。</p>		

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

- | | | |
|------|-------|----------------------|
| 委員長 | 河合正朝 | (千葉市美術館館長) |
| 副委員長 | 岡田保良 | (国士舘大学イラク古代文化研究所教授) |
| 委員 | 石川日出志 | (明治大学文学部教授) |
| 委員 | 小笠原直 | (公認会計士) |
| 委員 | 児嶋薫 | (実践女子大学文学部美学美術史学科教授) |
| 委員 | 小松大秀 | (公益社団法人永青文庫館長) |
| 委員 | 齋藤努 | (国立歴史民俗博物館研究部教授) |
| 委員 | 栄原永遠男 | (大阪歴史博物館館長) |
| 委員 | 榊原悟 | (岡崎市美術博物館館長) |
| 委員 | 坂本弘子 | (朝日新聞社執行役員名古屋本社代表) |
| 委員 | 寺崎保広 | (奈良大学文学部教授) |
| 委員 | 寺田吉孝 | (国立民族学博物館教授) |
| 委員 | 名児耶明 | (公益財団法人五島美術館副館長) |
| 委員 | 浜田弘明 | (桜美林大学教授) |
| 委員 | 柳林修 | (元読売新聞編集委員) |

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 博物館部会

- 部会長 名児耶 明 (公益財団法人五島美術館副館長)
- 副部会長 浜 田 弘 明 (桜美林大学教授)
- 委員 小 松 大 秀 (公益社団法人永青文庫館長)
- 委員 榊 原 悟 (岡崎市美術博物館館長)
- 委員 栄 原 永遠男 (大阪歴史博物館館長)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 研究所・センター部会

- 部会長 岡 田 保 良 (国士舘大学イラク古代文化研究所教授)
- 副部会長 寺 崎 保 広 (奈良大学文学部教授)
- 委員 石 川 日出志 (明治大学文学部教授)
- 委員 齋 藤 努 (国立歴史民俗博物館研究部教授)
- 委員 寺 田 吉 孝 (国立民族学博物館教授)
- 委員 柳 林 修 (元読売新聞編集委員)